

ソードアート・オンライン～最速の刀使い～

カメ@ノゾミ推し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は転生したオリ主が原作キャラと一緒に奮闘する話です。
初めて投稿します温かい目で見てもらえるとありがたいです（笑）

目次

SAO	32
気づいたらゲームの中にいたんだけど ?! ステータスポイントみんなならどう振 る？（ボス攻略を添えて）	37
初めてのボス攻略（道中）（オラワクワ クすつぞく）	13
天国と地獄は紙一重（始まりのボス攻 略）	19
ロリなビーストティマーと最速の刀使 い（ロリに懐かれた刀使い）	56
最速の刀使い（柄にも似合わないこと デュエルの前の静けさって異様に緊張	28

するよね

64

激突！『神速』VS『神聖剣』～可愛い

人や美少女の頼み事つて大体断れないよ

なう

70

舞い戻りし神速前編
舞い戻りし神速中編

100

なんか知らんけど親になつてた件につ
いて

75

激突！『神速』VS『神聖剣』後編
勝利の女神はどちらに傾く～前編

115 110 104

暇を持て余した『神速』の遊び

82

親の気持ち～実際に親になつたことな

いからわからんけど～

90

激突！『神速』VS『神聖剣』完結編
勝利の女神はどちらに傾く～後編

128

色々考えても分からぬんは分から

ない～但し考えることはみんな辞めない

エピローグつてやつさ

で～

96

A
L
O
I

144

久しぶりにやるのは大体忘れる

プロローグという名の駄文

156

2度目のリンク・スタート＼初めての

いよね

189

ことには誰もが弱気になるものさ＼

161

ああ＼娘が可愛いんじや＼（お巡りさ

んこいつです）

168

男つてたまにカツコつけたくなるよね

173

弄るのは大好きだけど弄られるのは
ちょっと無理つてやつ結構いるよね

179

子供に説教されるつてかなり心に来る
んだね……

184

人に言われて初めて気づくことって多
空を飛ぶつてイメージじやなんとかな
らない部分つてあるよね

強いが故に周りが見えづらくなるつて

本当にあるんだね

199

たまに褒めてるのか馬鹿にされてるの
かわからないやつつてあるよね

204

S A O

気がつくと見知らぬ場所に少年が立っていた。

「アイエエ!!? ココどこ✉」

とりあえず落ち着けもちつけ、なんで俺はこんな場所にいる? というかなんでこんなにも周りが騒がしいんだ?

「それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え」

アイテムストレージ? 唯一の現実? 何を言つてるんだ? とりあえず周りの人の真似をしてみるか

「なんだ? これ? というかこのメニューつてもしかして…」

「ここつてもしかしてS A O✉ ということは俺は転生というやつをしたのか?」

「つづうことはここに手鏡があるってことだよな? オ! あつたあつたこれをオブジェクト化してみればいいんだな?」

？何もおこらねえぞどうなつてんだ？どうして周りは変わったもとい戻つてんのに俺は変わらねえんだ？

「…以上で『ソードアート・オンライン』正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」

おつと考えすぎて何も聞いてなかつたけどとりあえず100層クリアすればいいんだろ？

「いいぜやつてやるよ俺だつてゲーマーの端くれだ絶対にクリアしてやるよ」

少年は不敵に笑いフィールドへと駆け出した

その少年の名は神居 刀矢 プレイヤーネームカイト

なんて言つて飛び出してきたけど正直どこに行けばいいか分からんな：

「ま、なるようになつれだろ知らんけど」

「一応次の村みたいなどころまでついたけどこれからどうすつかなくそいういやスキルの確認とかしてなかつたな今のうちにしておくか」

「えくとスキル欄はつとあつたあつた曲刀と後は無しか一個空いてるし素敵でも入れてみるか」

明日からはレベル上げをどれくらいだつけ？安全マージンは階層+10レベぐらいだつけ？とりあえず10後半ぐらいまで頑張つてやってみるか……

はいやつてまいりました。私は今どこにいるかというと迷宮区に一番近い街トールバーナにきました

え？ レベリングの光景？ ただひたすらにモンスター分かるだけだからカットだよそんなん。 ベ、別にめんどくさいから書かなかつたとかじやないんだからな（誰得）

さて話を戻しますとなんでここに来たかつて話。

まあ簡単に言うとレベルは目標の15になつたからこれから迷宮区を攻略していくこうかなつて思つてここに来たんだよね（関風）。

冗談はさておき街の散策でもしようかな…アイテムの補充もしなきやなんねえし後は単純に場所を覚えておきたい。

そんな風景見せると思つたかつまうんから見せんよ。

さていい感じに日も暮れてきたし泊まれることを探すか…こういうのを探すのもMORPGの醍醐味でもあるよな。まあその風景もバツサリカットするけどね。

さて朝ですよ今日もカイトさんは元気にやつていきますよ～ん？あれ～え？攻略会議？もうボス部屋見つけた？そんなバカな俺の意気込みを返

せ！

というわけで攻略会議に参加しますよ、ホントに俺の意気込みを返してほしいわ！まあそんなんでもなかつたから別にいいけど。

ああ～なんかサボテンが喚いてるな～ん？へ？パーティを組めと？周りの人と？まあ残つてるとでいいか

ん？あそここの2人組が余つてそうだな入らせてもらうか

「なああんたらつてパーティ組んでるか？よかつたら入れてもらいたいんだけど」

「ああ問題ないよあんたもそれでいいか？」

「…ええ問題ないわ」

「サンキュ俺はカイトよろしくな」

「俺はキリトこつちこそよろしく」

「…私はアスナボス攻略の間だけだけどよろしく」

うーん最初の頃のアスナつて掴みどころがわかんないな…まあそのうち慣れるだろ

あの中だで話してるやつの名前なんだつけ？まあなんでもいいかそいつの「解散」つて言う前にアスナが立ち去ろうとしたその去り際にキリトに向かつてなんか言つてたけどなんて言つたかは俺には聞こえなかつたまあ知る気もないけど

ステータスポイントみんなならどう振る？～ボス攻略を添えて～

おいつす～☆どうも今日も元気なカイトさんだよ～今何をしてるかって？

「……で、説明つて、どこでするの？」

「あ、ああ：俺はどこでもいいけど。その辺の酒場とかにするか？」

「……嫌。誰かに見られたくない」

「なら、どつかのNPCハウスの部屋とか：でも、誰か入ってくるかもしれないしなあ。どつちかの宿屋ならカギかかるけど、それもナシだよな」

「当たり前だわ」

と言ふうにどこでスイッチの仕方、POTローテの仕方の説明をするか話し合っているまあ上に書いている通り俺はあんまり参加してないけど

というか時々アスナがこっちをチラチラと見てくるんだけど俺なんかしましたかねえ？

「…だいたい、この世界の宿屋の個室なんて、部屋とも呼ばないようなばっかりじやない。六畳もない一間にベッドとテーブルがあるので、それで一晩五十コルも取るなん

て。食事とかはどうでもいいけど、睡眠だけは本物なんだから、もう少しいい部屋で寝たいわ』

「え…そ、そう?」

『俺とキリトで被つてしまつた いやだつて仕方ないじやん流石に2週間くらいここにいるんだつたらそれくらいわかると思うじやん

というふうに思つていると

「探せばもつといい条件のどこもあるだろ? そりや多少値が張るかもだけど……」

「多分だけど【INN】の看板が出ているとかしかチェックしてないんじやないか?」

「ああ…なるほど。この世界の低層フロアアじや、最安値でとりあえず寝泊まりできる店つて意味なんだよ。コルを払つて借りられる部屋は、宿屋以外にもけつこうあるんだ」

そう説明するとアスナの唇がぽかんと丸くなつた。可愛い(確信)目見えないけど

「な…そ、それを早く言いなさいよ…」

「なら俺の部屋くるか? 風呂もついてるしそれに部屋も余つてるから話せる場所も確保できるぞ」

「それならカイトの部屋に……」ガシツ

「それならなんか腕が掴まれた感覚がそれとどことなく似たような経験があつたような

「…………なんですって？」

「え、えつと部屋が余つてる……？」

「そのまえ」

「ふ、風呂つき……？」

「あなたの部屋、一晩なんコル？」

「え、えつと確か八十五コル」

「その宿、あと何部屋空いてるの？ 場所はどこ？ 私も借りるから案内して」

「あー、俺さつき部屋が余つてるつて話たよな？」

「……ええ話してたわね」

「それって丸ごと借りてるつて意味なんだ。一応あるにはあるけど同棲みたくなつちやうから変な噂とかたつちやうけど大丈夫か？」

「そのくらいなんともないわお風呂に入れればなんでもいい」

「お、おうなら俺の泊まつてるとこに案内するよ」

「なんでそんなに必死になつてるかわからんけどなんかの間違いさえなければ大丈夫

だろ

「……どうぞ」

「……ありがと」

ああ～ようやく帰つてこれたぜえ～これで落ち着いて話し合いができるな

「な、何これ、広つ……」、これで私の部屋とたつた35コル差?!や、安すぎるでしょ

「……」

「こういう部屋を速攻見つけるのが、重要なシステム外スキルってやつだよな?・キリト。
まあ俺は他のM M O R P G をやり込んでたからできたけど……」

「あ、ああ俺の場合は違うけど……」

「?あ、見れば解ると思うけど、風呂場そこだから……」自由にどうぞ

「あ……う、うん」

「さて、アスナも風呂に入つたしキリトよお前さん元ベータだろ？さつきの会話からかなり後ろめたくなつてたからちよつと気になつてたけど」

「☒……そうだよ元ベータだつたらなんだ？キバオウとおんなんじようにコルを全部出せつて話か？」

「ああーすまんそんなつもりで言つたわけじやないんだほんとにただ気になつただけだからそんな怒らんでくれ」

「……そうか」

「ベータテスターなんていてもいいと俺は思うけどな：いなかつたら正直ここまでスマーズ……とまではいかねえけど来れたんだからよつとこんな感じでいいか」「？何をしてたんだ？」

「ポイントを振り分けてた」

「マナー違反だけどどんな感じに振つたんだ？」

「いいつて別に喋らなきや問題なんてねえんだからよ AGI 極振りだ」

「なんでAGIにほとんど振つたんだ☒そんなの攻撃を受けたらすぐ死ぬぞ☒」

「当たらなきやいいんだよ当たらなきやな」

「そんな軽々しく言つてもな…………」コンコンコン

「ん？こんな時間に誰だ？」ガチャ

「はーいなんでしようか?」

「おつと夜遅くにすまないナここにキー坊はいるカ?」

「キー坊?ああキリトのことか?ならいるよ中に入つてくつろいでくれ」

「おーすまないナなら失礼するヨ」

「にしてもこんなに広い部屋があるなんてナ初めて知つたヨ」

「俺も最近だよ知つたのは、今までいいところがないか探して漸く見つけたからな。でもキリトのところにあるミルクはねえよあれ欲しかつたんだけどな……」

「まあいいじやないかこんだけ広い部屋があればさ」

「ああそういうキリトに用事があるんだつたな俺は抜けた方がいいか?」

「別に構わないヨ、そんジャ、本題に入るヨ」

「まあ、依頼人がいるつて時点で察しはついてると思うけどナ。例の、キー坊の剣を買いたいって話……今日中なら、三万九千八百コル出すそーダ」

さ、三万九千八百コル▣そんな金があるならおんなじ武器が作れると思うなーカイトさんは

「…………あんたを侮辱するつもりはないけど……それ、何かの詐欺じゃないのか?ど
う考へても、四万コルは間尺に合わないよ。だつて、素体の『アニールブレード』の相
場が、確かにいま一万五千くらいだろ?それに二万足せば、ほぼ完全に強化できるだけの

素材アイテムも買えるはずだ。ちょっと時間はかかるかもしれないけど、三万五千コルで俺のと同じ剣が作れる計算だぞ」

「オレっちも、依頼人三回そう言つたんだけどナ！」

「なかなか重い話だなこれは：にしてもなんで依頼人はキリトの剣を買う必要がある？」

「……アルゴ、あんたのクライアントの名前に千五百コル出す。それ以上積み返すか、先方に確認してくれ」

「んじや名前を聞かないように俺は別の部屋に行くよ終わつたら呼んでくれ」

「ああ……すまないな」

「別にいいってことよ」

「んじやまアイテムの整理をしますかね

「カイト終わつたぞ」

「おう今行く」

「そんじや、オレつちはこれで失礼するヨ。その攻略本、役に立ててくれよナ」

「ああ……」

「つと、帰る前に、悪いけど隣の部屋借りるヨ。夜装備に着替えたいカラ」

「ん? ああ問題ないぜ」

「ん? 今なんつつた? 隣の部屋? 隣の部屋なんて風呂場しかないけど: つて風呂場にはアスナがいるんじや: まざい!!?」

「ちよ、待つてく……」

「わあア☒」

「…………きやああああ!!?」

あつ (察し) よしこうなつたら

「…………煩惱滅却すれば火もまた涼し!!? !!? !!? !!?」 ガンガンガンガンガン!!

? !!? !!? !!? !!?

「カイト☒いきなりどうした☒」

その後の記憶がない

初めてのボス攻略（道中）～オラワクワクすつぞく

オツスオラカイトこれからボス攻略なんだけんワクワクしてきたぞ
っていう茶番は置いといて、実は昨日の夜から何をしてたのか思い出せないんだ。キ
リトやアスナに聞いてもわからないつていうから困っているところだ。まあ考へても
意味ないから目の前のことだけに集中するかな

「おい」

後ろからサボテ・ゲフングフントゲトゲ頭のプレイヤーが話しかけてきた
唚然とするキリトを睨みつけながら

「ええか、今日はずっと後ろに引っ込んだれよ。ジブンらは、わいのパーティーのサポな
んやからな」

こいつ偉そだな後でサボテンからハゲにさせたろうか

「大人しく、わいらが狩りもらした雑魚コボルドの相手だけしどれや」
マジでこいつハゲにさせたろうか悩んでいると右隣から

「……何、あれ」

さらには左隣から

「さ、さあ……。ソロプレイヤーは調子乗んなつてことかな……」

そんなんだつたらほとんどのプレイヤーが調子乗つちやいけないつてことだろギルドなんてまだ先だろし、なんて思つてると誰だつてあの青髪の人ディアダムだつける話し始めた

「みんな、いきなりだけど……ありがとう！たつた今、全パーティ四十五人が、一人も欠けずに集まつた!!？」

う、うるせえ何でこんなに元気なんだよこいつらすぐえな

「今だからいふけど、オレ、実は一人でも欠けたら今日は作戦を中止しようつて思つてた！でも……そんな心配、みんなへの侮辱だつたな！オレ、すげー嬉しいよ……こんな、最高のレイドが組めて……。まあ、人数は上限にちよつと足りないけどさ！」

やかましいわなんだつたら今から抜けてやろうかな？

「みんな……もう、オレからいふことはたつた一つだ！」

お、何をいうのかなどうせ勝とうぜ!!？みたいなこと言うだけだろ

「…………勝とうぜ!!？」

なんで普通のこと言つちやうかなもつとひねろうぜ

「……ねえ、あなたたちは、ここに来る前も他のエ……M M Oゲーム？っていうの、やつてたんでしよう？」

「ん……あ、ああ、まあね」

「かなりやりこんでたな」

「他のゲームも、移動の時つてこんな感じなの？なんて言うか……遠足みたいな……」

「……はは、遠足は良かつたな」

「残念ながら、他のタイトルじやとてもこうはいかなかつたよ。だつて、フルダイブ型じやないゲームは、移動するのにキーボードなりマウスならコントローラーを操作しなきやならないからさ。チャット窓に発言を打ち込んでる余裕はなかなかない……だよなカイト」

「ああ、けどボイスチャット搭載のゲームはその限りじやないさ」

「ふうん」

「…………本物は、どんな感じのかしら」

「へ？ほ、本物？」

「だから…………こういうファンタジー世界が本当にあつたとして……そこを冒険する剣

士とか魔法使いとかの一団が、恐ろしい怪物の親玉を倒しに行くとして。道中彼らは、どんな話をするのか……それとも押し黙つて歩くのか。そういう話」

「……それを日常として生きてるんだから喋りたいときに喋つてあとは黙るんじやね？これからボス攻略をどんどんしていくんだ俺たちもそういう風になると思うぜ」

「……ふふ、ふ」

そんなに面白いこと言つたかな俺、それともバカにされてる？後者だつた場合すげえ傷つくんだけど

「笑つて御免なさい。でも……変なこと言うんだもの。この世界は究極の非日常なのに、その中で日常だなんて」

「そうかもしんねえな……けどよ今日でもう一ヶ月なんだ。仮にここを突破したとしても後方に九十九層残つてんだ。俺はさ……二、三年かかると思つてるそれを続ければ非日常も日常になるさ」

「…………強いのね。わたしには、とても無理だわ。この世界で何年も生き続けるのは…………今日の戦闘で死ぬことよりずっと怖く思えるから」

すると左隣から

「上の層までたどり着ければ、もつとすごい風呂があるのになー」

「…………ほ、ほんとに？」

「……思い出したわね。腐った牛乳ひと樽、ほんとに飲ませるからね」

「なら、少なくとも今日は生きて帰らないとな」

「俺の知らないところで何があつたんだ? こいつら仲がいいのか悪いのかいまいち掴めないな 後俺の会話少なすぎじゃね? (今更)

「さてカイトさんは今どこにいるかと言うと迷宮区最上部を踏破しボス部屋前まで来ていますよ」

「……ちよつといいか」

「ん? なんだ?」

「今日の戦闘で俺たちが相手する『ルインコボルド・センチネル』は、ボス取り巻きの雑魚扱いだけど十分に強敵だ。昨日もざつと説明したけど、頭と胴体の大部分を金属鎧でがっちり守ってるから、あんたの『リニア』もただうつたんじや徹らない」

「わかつて。貫けるのは喉元一点だけ、でしょ」

「そうだ。俺らが奴らの長柄斧をソードスキルで跳ね上げさせるから、すかさずスイッチで飛び込んでくれ」

なんか知らん間に役割が決まってた件についてまあそこまで苦ではないから別にいいか

「……いくぞ！」

ディアベルは短く一言だけ叫び、思い切り押し開けた。

天国と地獄は紙一重く始まりのバス攻略

「ウイーーーース!!? どうもカイトでーーーす!!?」

冗談はさておき今俺は何をしているかと言うと……

「スイッチ!!?」

「はあああ!!?」

バス攻略に来ております。まあ俺の出る幕がなくなつてんだけどね(=^_^=)
というかアスナさん? あなた俺のことパートナーにするつて言つてたくせにキリト
と組むんですね べ、別に悲しくなんてないんだからね! (誰得(二回目))

まあ別にいいんだけどな攻略に参加してない分バスのことを持ちやんとした感じでみ
れるから。攻略本に載つてたようになテストと違う部分を集中して見分けるような
環境が欲しかつたところだし、そういうやタルワールつてどんな形だつたかな? 俺が見る
限り違う形状な気がするぞ? 刀に見えなくもないなあれば

お? バスのHPが半分くらいまで削れたな とりあえずキリトに報告かな

「キリト少しいいか?」

「ん? どうした? 姿が見えなかつたけどなんかしてたのか?」

「ボスの様子を観察してた」

「なんでそんなことを？」

「攻略本に書かれてたろ？βテストと違うかもしんねえってだからさ」

「それで何かわかつたのか？」

「多分あいつのサブ武器タルワールじやない。もしかしたら刀かもしんねえ。形状が明らかに違った」

「☒それはマズイ!!? ボスのHPはどのくらいだ☒」

「今もう少しでラスト一本だ。刀だと何がマズイんだ？」

「刀を使ったモブは10層からでしかいないんだ!!?」

「は？ 刀は10層から？…つまり最低でも10層からのソードスキルが出るかもしんねえってことか!!?」

「よっしゃー!!? ラスト一本だ!!?」

「みんな下がれ!!?俺が出る!!?」

「デイアベルさん!!? バシッと決めてやれ!!?」

「デイアベル!!? 全力で後ろにとべ!!? !!? !!?」

☒マズイ!!? 間に合え!!?」

ガキン!!?!!?

「重えなこの刀!!?!!?うらあ!!!」

「ガルルルル!!」

「カイトさん!!」

「さつさと下がれ!!死にてえのか☒」

☒……すまない一旦任せた

「おう、任せられた。さあやろうぜ! デカブツ野郎!!」

今までやらなかつた分を今からこいつにぶつけてやる!!

「おらあ!! 「ブン!」 つちあぶねえじやねえか!!」

「なんだ…あいつ…どうしてたつた一人であんな受け流せるんだ?」

ガツ

「グハッ！」

「カイト!!? 大丈夫か!!?」

「くそつ!!? 野郎やりやがるじやねえか：けどマズイなこのままだとジリ貧で俺が死ぬな……」

「あんまり無茶はするな！ いつか必ず決定打をもらうぞ！」

「そうだ！ いつまでもダメージディーラーがタンクをするんじやねえ。タンクは俺たちに任せろ」

「わたしにもやらせて一人だとまたさつきみたいになるから、それに私たちコンビを組んでるでしょ？」

「こんな時だけコンビ扱いかよ「何か悪い？」おお怖いこと、まあ確かに俺一人だと死ぬな…けどアスナお前がいればなんとかなる頼りにしてるぜ？」ニコツ

「つ図ええあなたもね？」

「？うし、いくぞ!!」

相手の残りHP後四割攻めされる!!

曲刀三連撃スキル《リルガル・リーヴァ》

「くそつ！ たらねえか！ 後少しなのによう！」

細剣単発スキル 《リニアー》

「はああ!!」ザシユツ

「グラア団」ズドン

団《転倒》か?なら……

「キリト!!」

団みんな囮んでいいフルアタックだ!!

このHPの減りじやフルアタックで間に合わない…なら…

「アスナ最後の《リニアー》一緒に頼む!」

「了解!!」

俺はアスナと同時に駆け出しインファルグザ・コボルドロードに向かって全速力で走る

まず先にアスナのリニアーがインファルグザ・コボルドロードの脇腹に打ち込まれる

それに少し遅れて俺の剣が右肩から腰まで切り裂いた。獣人がニヤツと笑った気がした。それに対しても俺は不敵に笑みを浮かべ曲刀二連撃スキル《リーヴア》の二連撃目が左肩へと抜けていった

「お疲れ様」

そつか終わつたのか…めっちゃ疲れたな予想以上に身に染みたぜ

「…見事な剣技だつたぞ。コングラツチュレーション、この勝利はあなたのものだ」

「いや…………」

「なんでや!!なんでディアベルはんを殺そうとしたんや!!」

「殺そうとした…………?」

「せやろが!!あんたがボスの情報を提供していればこんなことにはならなかつたはずや

!!

「俺知つてる……こいつ元ベータテストだ…だからこいつうまいクエとか色々知つてる
んだ」

「おい…お前…」

「あなたたち：いいかげんに…」

「は、はははwww：俺がベータテストー？何いつてんだ？あんなクソどもと一緒にす
るなよ。それと勘違いするなよ情報は少なからずあつたはずだぜ？攻略本に書いて
あつたろ？βテストの時と違う可能性がありますとそう書かれてたはずだぜ？それを
見づにやれ情報を提供しろなどふざけたこと言ってんじやねえよくだらねえ。それに

結果論：デイアベルだっけ？そいつが生きてんだからいいだろ別に：それに二層への
アクティベートはしといてやる死ぬ覚悟があるやつだけ追いかけてきな」
ああ～すげえくさいセリフ言つちまつたなあ～まあヘイトが俺だけに向けばそれで
いいか

「なんでついてきた…？」

「…伝言があるからよ」

「伝言……？」

「…キバオウさんとエギルさんとキリト君からの伝言……『今回は助けてもらたけど次からはいらんわいはわいのやり方でクリアを目指す』ってキバオウさんから『またボス攻略しようぜ』ってエギルさんから最後にキリト君から『カイトに背負わせてしまったみたいでごめん』って」

「そつか、キリトには俺の方こそすまんこれからもよろしくつて言つといてくれ」

「……ほんとはね、カイト君あなたにお礼を会うために追いかけてきたの」

「…なんのだ？」

「……いろんなことのお礼。わたし……この世界で、初めて目指したいもの、追いかけたいものを見つけたの」

「……へえ……よかつたじやねえか」

「……うん。……わたし、頑張る。頑張つて生き残つて、強くなる。目指す場所に行けるようにな」

「ああ……。おめえは強くなれる。剣技だけじゃなく、もつとずっと大きくて貴重な強さを身につけられる。だから……もしいつか、誰か信頼できる人にギルドに誘われたら、断るなよ。ソロプレイには絶対的な限界があるから……」

「……じゃあ、またね、カイト君」

よしうよくよしてても意味がねえ早速フィールドに出てレベリングするぜ!!

ロリなビーストティマーと最速の刀使い～ロリに懐かれた刀使い～

挨拶のネタが思いつかなくてヤバいですね☆どうもカイトさんですよー
今わたしはどこにいるかと申しますと

「……わるい。君の友達、助からなかつた」

「お願ひだよ……あたしを独りにしないでよ……ピナ……」

三十五層に来ております。本来なら別の用事があつたんだけど…目の前でやられて
る人がいれば助けたくなるわ だつてデスゲームだもん

とりあえず助からなかつたから謝らねばばば

「……わるい」

「……いいえ……あたしが……バカだつたんです……。ありがとうございます……助け
てくれて……」

「……偉い子やな普通なら逆ギレされてたと思うんだけど…けどまずは確認からだな
……その羽根だけどな。アイテム名、設定されてるか？」

多分俺の予想が正しければ《心》があるはず…普通なら羽根だけ残るのはおかしい…

死んだら四散するはず

そこに表示されていたのは

『ピナの心』

▣ビンゴ!!?ん?けどなんで泣き出しそうなんだ▣

「ま、待つた待つた。心アイテムが残つていれば、まだ蘇生の可能性がある」

「え▣」

「最近わかつたことだから、まだあんまり知られてないんだ。四十七層の南に、『思い出の丘』っていうフィールドダンジョンがある。名前のわりに難易度が高いんだけどな……。そこのてっぺんに咲く花が、使い魔蘇生用のアイテムらしー」

「ほ、ほんとですか▣」

「うお▣すげえ元気だなん?また肩が落ちた

「……四十七層……」

「……あーっと、別に俺が行つてきてもいいんだけど使い魔を亡くしたビーストティマー本人がいかないと、肝心の花が咲かないらしいんだよな……」

「いえ……。情報だけでも、とつてもありがたいです。頑張つてレベル上げすれば、いつかは……」

「それがそうもいかないんだ。使い魔を蘇生できるのは、死んでから三日だけらしい。

それを過ぎると、アイテム名が『心』が『形見』に変化して……」

「そんな…………！」

最近の子は感情が豊かでいいなーっとそんなこと考えてる暇はないよな…正直あそ
こくらいなら俺一人でなんとかなるけど……この子を連れてだとちよつちきついかな…
確かアイテム欄にアレがあつたはず…

お！あつたあつたこれでなんとかなるだろ

「あの……」

そりや戸惑うよないきなり装備を渡されると

「この装備で六、七レベル程度底上げできるさ。俺も一緒に行けば、なんとかなるだろ」
「えつ…………」

ん？なんでこんなに見つめられるんだ？そ、そんなに見つめないでくれカイトさんは
恥ずかしがり屋なんだぞ！（誰得（三回目））

「なんで……そこまでしてくれるんですか……？」

冗談はさておき…そりや警戒するよな……

「人を助けるのに理由なんているか？……まあ周りの人たちからはお人好しつてめちゃ
くちゃ言われるけどな」

なんか笑われたんだけど図俺そんなにおかしいこと言つたかな？

「よろしくお願ひします。助けてもらつたのに、その上こんなものまで……」

「あの……こんななんじや、全然足らないと思うんですけど……」

「いや、お金はいいよ。どうせ余つてるやつだし、それと俺はお金が欲しくて助けたわけじゃないからさ」

まあ他にも理由はあるにはあるけど別にこの子に話す意味はないからな

「すみません何から何まで……あの、あたし、シリカつていいます」

「俺は、カイト。しばらくの間、よろしくな」ニコツ

「☒?!?…………はい…………／＼／＼

ん？なんか顔が赤くなつてんだけど大丈夫か？ゲーム内だから風邪をひいたつてわけじやないだろうし、よくわかんねえや

最速の刀使い～柄にも似合わないことは絶対にするな～

おいつす～☆今日も元気に頑張るぞい☆どうも～カイトで～す。

今日は三十五層の主街区に来ておりますまる。（作文風）

今はシリカに連れられて主街区の中心部まで来ている。
かなり人気なんだろうなすれ違うプレイヤーの殆どが声をかけてる。つと考えすぎ
て周りがどうなつてたか気にしてなかつたな

「あ、あの……お話はありがたいんですけど……」

すげえな、受け答えが嫌味にならないようにしてる…できた子やな
「……しばらくこの人とパーティーを組むことになつたので……」

ん？なんでヘイトが俺に向くんだ？それはお門違いだろ……

「おい、あんた」

「お？なんどすええ～

「見ない顔だけど、抜けがけはやめてもらいたいな。俺らはずつと前からこの子に声を
かけてるんだぜ？」

「んなこと言われても俺から迫つたわけじやないんだぜ？」

たく、めんどいやつらしかいねえな

「あの、あたしから頼んだんです。すみませんっ」

アイエエ引つ張らないで服が、服が伸びちゃうう !!.? (キモイ)
おい作者ゴラ、あとでぶつ飛ばすぞ
あつすいません (主)

「……す、すみません、迷惑かけちやつて」

「いやいや」

「すごいな。人氣者なんだな、シリカつて」

「そんなことないです。マスコット代わりに誘われてるだけなんです、きっと。それなのに……あたしいい気になっちゃって……一人で森を歩いて……あんなことに……」
ううん、やっぱり心配なんか? そりやそうか友達だもんな…よし! こうなつたらお兄さん元気付けるようにコミュ障なりに頑張るぞい☆

「だいじょうぶ」

「絶対生き返らせられるさ。心配すんな」

「あ、カイトさんホームはどこに……」

「ん？ああ、いつもは五十層なんだけど……。面倒だから俺もここに泊まるよ」「そうですか！」

こんなに嬉しそうにしちゃつて……妹がいたらこんな気持ちになるんかねえ、妹持ちの人はいいねえそりやシスコンになるわ

「ここ」のチーズケーキがけつこういけるんですよ

ん？なんだあいつ……こっちをみやがつて……やだあいつきもちわりい
「あら、シリカじゃない」

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかつたわね」

☒ こいつあの……

「でも、今更帰つてきても遅いわよついさつきアイテムの分配は終わつちやつたわ
「要らな いって言つたはずです！——急ぎますから」

ほんとに性格わりいな……聞いた通りだこいつで間違いないな……

「あら？あのトカゲ、どうしちゃつたの？」

☒ こいつ傷に塩を塗るタイプか☒

「あらら、もしかしてえ……？」

「死にました……。でも！」

ほんとに強いなこの子は……

「ピナは、絶対に生き返らせます！」

こんな子をあいつは狙つてる……絶対に守つてやるからな……

「へえ、てことは、『思い出の丘』に行く気なんだ。でも、あなたのレベルで攻略できるの？」

「できるさ」

こいつにはガツンと言つたほうがいいかもな……まあ俺に言える度胸があればな

「そんなレベルの高いダンジョンじゃない」

こつちを見るな外道が……

「あんたもその子にたらし込まれた口？ またとかそんなに強そうじやないけど」

「人は見かけによらずつてな……あまり舐めてるとデュエルでもして俺の実力を無理にでもわからせてやろうか？」

殺氣を込めて相手を睨む

少しばかり震えてるな……それさえわかりやいい……さてシリカの方も怖がつてゐた
いだし

「行こう」

36 最速の刀使い～柄にも似合わないことは絶対にするな～

「ま、まあ、せいぜい頑張つてね」
(強がりもたいがいにせよ) これはさすがに言わんけど

最速の理由へやつぱ二つ名つて正直いらんくない？

おいつす／＼☆どうもカイトで／＼す。この挨拶を定着させて行こうかなつて思つてる
よ☆

さて気持ち悪い挨拶はおいといて、今何をしているかというと

「ぎや、ぎやあああああああ！？なにこれー！？き、気持ちワル——！？」

……四十七層に来ています……シリカ……強く生きろよ……

「や、やあああ！？来ないで——」

冗談はさておき一応シリカの戦闘のレベルを上げて欲しいから戦わせてるけど結構
キツそうだな～

「やだつてば——」

はあ…つたく少しばかり助言してやるか

「だいじよぶだつて。そいつは凄く弱いから。花のすぐ下の、ちょっと白っぽくなつて
るとこを狙えば簡単に……」

「だ、だつて、きもちわるいんですねうううう——」

「そいつで気持ち悪がつてたら、この先に進んだら大変だぞー。花がいくつも付いてい

るやつや、食虫植物みたいなのや、ぬるぬるな触手が山ほどに生えたやつまで……」「キエ——!!?」

「おうふ……ここまでとはさすがのカイトさんも思わなかつたぞ……あーあソードスキルをめちゃくちゃにやつちやつて……持ち上げられるっていうハプニング起こらねえかな」「わ!!?」

「わお……ほんとに起きちやつたよ……」

「わわわ!!?」

あーさすがにこれは犯罪になっちゃうかなー俺捕まりたくないから見ないようにしよーっと

「カイトさん助けて！黙つてないで助けて!!」

「そ、それはーそのー無理かなーつて」

「こ、この……いい加減に、しろつ！」

あつもう少しで見えちやう……見ないよう見ないように見ないように……

スタッツ

「……見ました？」

「……見てないさ」

そのあと五回ほど戦闘したのちようやく慣れたのか順調に進んでいった

「あれが『思い出の丘』だよ」

「見たとこ、分かれ道はないみたいですね？」

「ああ。ただ登るだけだから道に迷う心配はないけど、モンスターの量は相当らしいな。気を引き締めていこうか」

「はい！」

元気がいいな…そりやそうかあとちょっとでピナを生き返らせるんだから

だからといつてあんまり早く行かないでほしいな、いくら倒せるようになつたといえどここは今まで進んできた道よりもモンスターが湧くからあまり俺のそばを離れないでほしいな

つとそろそろ着くかな

「うわあ……！」

女の子にとつてここは楽園なのかな?すごい喜んでるのがわかる。つと遅れるわけにはいかないよな

「どうとう着いたな」

「ここに……その、花が……?」

「ああ。真ん中あたりに岩があつて、そのてっぺんにあるはず……」

「あ、ちよつ……はあ……追いかけるか

「え……」

「ありや?まだ咲いてないんかね?」

「ない……ないよ、カイトさん!」

「いや、ほら、見てごらん」

「あ……」

ようやつと咲いたか…全く心配かけんなよ運営さんよ

「これで……ピナを生き返らせられるんですね……」

「ああ。心アイテムに、その花の中に溜まつていく雪を振りかければいい。けどここはモンスターが多いから、町に帰つてからの方がいいだろうな。もうちつと我慢して、急いで戻ろうぜ」

「はい!」

さて早よ帰るか……！まさか着いてきてるとはな

「——そこで待ち伏せてる奴、出てこいよ」
「え…………！」

ようやつとお出ましか……さてここからは俺の用事を済ませるか
「ろ……ロゼリアさん…………？なんでこんなところに…………？」

「ごめんなシリカ君を囮に使うようなことをさせちまつて……
「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い素敵スキルね、刀使いサン。あなた
どつてたかしら？」

「その様子だと、首尾よく『プラウマの花』をゲットできたみたいね。おめでと、シリカ
ちゃん」

「じゃ、さつそくその花を渡してちょうだい」

「…………？な……何をいってるの……？」

さあこつからは俺のターンだぜ？

「そうは行かないな、ロザリアさんだつけ？いや――ゴミオレンジギルド『タイタンズハ
ンド』のリーダーさん、といった方がいいのかな？それともほんとにゴミって呼んでも
いいかな」

お？怒ってる？はははwwwこんな挑発でおこんのかよwwwけどそれ以上にて

めえらはほかのプレイヤーたちをバカにしてきたんだぜ？それに飽き足らず殺しもしてきたそんな奴らに慈悲はねえよ

「え……でも……だつて……ロザリアさんは、グリーン……」

「オレンジギルドと言つても、全員が犯罪者カラージやない場合も多いんだ。グリーンのメンバーが街で獲物をみつくろい、パーテイーに紛れ込んで、待ち伏せポイントに誘導する。そんなのはあいつらにとつて普通なんだよ」

「そ……そな……」

「じゃ……じゃあ、この二週間、一緒のパーテイーにいたのは……」

「そうよオ。あのパーテイーの戦力を評価すんのと同時に、冒険でたっぷりお金が貯まつて、おいしくなるのをまつてたの。本当なら今日にもヤツちやう予定だつたんだけどー」

喋るなBBA空気が汚くなる

「一番楽しみな獲物だつたあんたが抜けちゃうから、どうしようかと思つてたら、なんかレアアイテム取りに行くつていうじやない。『プラウマの花』つて今が旬だから、とつてもいい相場なのよね。やっぱり情報収集は大事よねえー」

「でもそこの刀使いサン、そこまでわかつてながらなかなかその子に付き合うなんて、馬鹿？それとも本当に体でたらし込まれちゃつたの？」

「黙れよ。そろそろ口を紡がねえと首を飛ばすぞ？それに俺はおめえを探してたんだよ
ゴミ野郎」

「——どういうことかしら？」

「あんたは十日前にあるギルドを襲つたな。リーダーだけが脱出した」

「……ああ、あの貧乏な連中ね」

「リーダーだつた人はな、毎日朝から晩まで、最前線のゲート広場で泣きながら仇討ちをしてくれるやつを探してたよ」

「でもなその人は依頼を受けた俺に向かつて、おめえらを殺してくれとは言わなかつた。黒鉄宮の牢獄に入ってくれと、そう言つたよ。——あんたに、あの人の気持ちがわかるか？」

「解なんないわよ」

「何よ、マジんなつちやつて、馬鹿みたい。ここで人を殺したつて、ホントにその人が死ぬ証「ならあんたで実験してもいいんだぜ？」あんた勝手に言わせていれば……でもさあ、たつた一人でどうにかなると思つてんの……？」

「ざつと十人くらいか……へえ……この程度で逆に俺に敵うと思つてんだ……舐められたもんだ……」

「か、カイトさん……人数が多すぎます、脱出しないと……！」

「安心しろ。俺が逃げろつていうまで結晶を用意してそこで見てればいいよ。高みの見物というやつさ」

「俺が負けるわけがねえよ……キリトのやつをデュエルで負かすまではよ……

「カイトさん……！」

「カイト……？」

「その格好……刀使い……。——『神速』……？」

「や、やっぱいよ、ロザリアさん。こいつ……トップクラスの、こ、攻略組だ……」

「へえ……俺を知ってるやつはいるにはいるんだな……嬉しくねえけど……」

「こ、攻略組がこんなところをうろうろしてるわけないじやない！どうせ、名前を騙つてびびらせようつてコスプレ野郎に決まってる。それに——もし本当に『神速』だとしても、この人数でかかればたつた一人くらい余裕よ!!」

何を自分に言い聞かせてるんだかそこまで怯えるならはよ諦めりやいいのによ

「そ、そうだ！ 攻略組なら、すげえ金とかアイテムとかもつてんぜ！ 美味しい獲物じやねえかよ!!」

はあ……残念な人たちだ

「カイトさん……無理だよ、逃げようよ!!」

さて……シリカも心配してくれてるし戦闘態勢に入つて速攻で終わらすか

「オラアア!!」

「死ねやアア!!」

「……うるせえよ、黙つてやられとけ」ヒュン

「う、嘘だろ……なんで俺の腕がねえんだ¶?」

「俺のも……」「俺のもないぞ!!?」

「わかるかこれが俺が『神速』と呼ばれる理由だ。俺のレベルが今八十それにAGIに極振りの人間なんだ、レベル差とステータスの違いだ数値が少しでも違うと大体のものが全部変わってくるそれがレベル制MMOの理不尽さというやつだ」

「チツ」ヒュン

「転移——」

「行かせると思うか?」

「ひつ……」

「てめえらには問答無用で牢獄に行つてもらう、コリドー・オーブン!」

「畜生……」

「な、なあ許してくれよ!ねえ!……そうだ、あんた、私と組まない?あんたの腕があれば、どんなギルドだつて……」

あばよ、現実ではこの罪を償えよ……

46 最速の理由～やっぱ二つ名って正直いらんくない?

「……わるい、シリカ。君を囮にするようなことしちまつて。ほんとのこと言おうと思つたんだけど怖がられると思って、言えなかつた」

「街まで送るよ、でも街に入つたら俺は報告に行かなきやなんないから」

「あ——足が、動かないんです」

「なんだよそれ……俺が緊張した意味ないじやん」 フツ

「!?……//／＼

「ん?なんか俺した?顔赤くなつたんだけど、あれ?なんかこれ二回目じやね?」

「カイトさん……行つちゃうんですか……?」

「ああ……。数日前線から離れちやつたしそれに……報告もあるからすぐ行かねえと」

「んじや、そろそろ行かねえと……あと、レベルなんてただの飾りなんだこの世界での強さはただの幻想なんだ。それよりもっと大事なものがある。だからよ、次はリアルでまた会おうぜ。そしたらまたおんなじように友達になれるさ」

「はい。きっと——きっと」

シリカ編終了

みんな自分の相棒（剣）を作つてもらうには絶対に腕のいいやつのところに行つたほうがいい

おいつす／☆どうもカイトさんだよ

今は何をしてるかというと、だいぶ前にアスナに紹介してもらつた鍛治職人のところに行こつかな／つて思つてるよ☆

えつ？なんでかつて？そりやお前新しい武器にそろそろ変えようかと思つての行動だよ、さてそろそろ着くかな／

おつ！あつたあつた、そんじやま入りますかね

コンコンコン 「お邪魔しま／す」

ん？誰もいないのか？ドアにOpenつて書いてあるから入つてだいじよぶだと思つたんだけど……ダメだつたか？

「すいません、誰かいますか？」

「!?すいません、作業に集中していたので気付きませんでした。リズベット武具店へようこそ！ご用件はなんでしょう

「ああ、実は、この刀より軽い刀を作つて欲しいんだ。知り合いの鍛冶屋だとマスタース

ミスでしか作れないらしいから、それでここにアスナの紹介で来たんだけど……作業が忙しいならまた後日出直すけど……頼めるなら頼みたいんだ」

「大丈夫ですよ。あらかた終わってますので……それではその刀を貸してもらつていいですか？」

「ほいっ……意外と軽いから落とさないでね？」

「大丈夫ですよさすがに落としませんよ……うわっ！ 軽っ！」

「これより軽くですか……それだと材料が少し足りないんですけど」「ああ、それなら軽そな素材をフルで持つてきた」……用意周到ね……これなら作れるわ……つは！ わたし口調が……」

「別に構わねえよ。俺は初対面の人でもタメ口だからよ。それに俺は別にそういう気にしねえし」

あとは同じ年っぽい人に敬語を使われると気持ち悪いってのは言わないでおくか……

「そ、ならいいわ……それじゃ作つておくから二日後に来てくれるかしら」

「おつけ二日後な、んじや頼んだぜ『閃光』と友達の鍛冶屋さん」

「ええ、まつかせなさい！」とびきりすごいのを作つてあげるから！」

「おう、頼んだぜ」

「あ、名前聞くの忘れた……まあアスナにでも聞けばいいか」

さて二日も暇になつたしレベリングでもしようかな？けどあのスキルの熟練度も上げたいし……どうすつかな……

「カイト君。久しぶり」

「ん？ おうおひさアスナ、どうした？ これからリズベット武具店にでも行くんか？」

「そうだけど…カイト君もしかして行つたあと？」

「おう、今すぐにでも欲しかつたからつていうのと、知り合いの鍛冶屋からマスタースミスでしか作れないって言われたから、この前アスナが教えてくれたじやん？だからそんときの記憶を頼りにな」

「そうなんだ………言つてくれれば一緒に行つたのに………」

「ん？ 最後の方聞こえなかつたなんつた？」

「な、なんでもないわよ！ それじゃそろそろ行くね…………あつー！ そうそうまたコンビ組みましょう時間があつた時に」

「ああ、時間があつたらな、んじやまたな」

二日後に行つたのだが開いておらず次の日にまた行つてみるとキリトとその店主が
イチャイチャしてカイトは心の中で（リア充爆発しろ!!）と思つた

スキルのご利用は計画的に～青眼の悪魔を添えて～（青眼つてさシャナみたいだよ
眼つてさシャナみたいだよね）

おいつすく☆どうもカイトさんだよ☆今日も一日頑張るぞい☆
今日は何をしてるかというと

「どつせーい！」ジャキン！

「グギャー！」パリンッ

「ふうう。とりあえずこら辺一帯は狩り尽くしたな」

はい実は七十四層の迷宮区にてレベリング中でした。まあこら辺一帯全部狩り尽くしたからそろそろ帰ろうか考えてるけど……

「あつ！カイト君！迷宮区で会うなんて珍しいね」

「よつ、カイトが夜中以外に狩りなんて珍しいな」

「ん、アスナ、キリト、おいつすく☆てかお前ら俺をなんだと思ってんだ？バカにしてんのか？してんだな？よしならキリトデュエルするぞ、安心しろ今の俺はすこぶる調子が良い」

「し、しねえよ！・調子が良いならなおやらねえよ！」

「逃げるのか貴様！ 許さんぞ！ 性の喜びを知りやがつて…許さんぞ！」

「それ出したらあかん！ そのおじさんはあかん！」

「まあ冗談はさておき、おまえらこそ珍しいな。コンビ組んだとこ初めてみたぞ」

「またまた目的が一緒だつたから成り行きでなつてるだけさ」

「そうよ、元はと言えばカイト君がコンビ組んでくれないからでしょ……あれだけ誘つてるのに……」

「？ 時間があつたらつて言つてるだろ？ 僕は昼夜逆転してるから時間が合わねえんだよ」

「……もう……」

「可愛い……じやなくて拗ねちまつたなあ……どうやつて機嫌を直すか……せやいいこと考えた

「なあ、キリト、おまえらつて迷宮区の攻略か？ なら俺もやらせてくれ」（ヤム○ヤ風）

「ああ、アスナがいいならな」

「行こう！ 絶対に行こう！ すぐに行こう！」

「お、おう、げ、元気がいいな」

「そんなに俺と攻略したかったの？ いや違うなただ俺がいたら攻略が楽になつてラツキ一いつ風にしか思つてないだろ

「そ、それじゃ行くか」

「カイト君つてどこまでマップを埋めてるの？」

「一応ボス部屋っぽいとこ以外は埋めてる」

「ならそのボス部屋まで行かないか？一応見るだけみてみようぜ」

「まあ、キリトがそう言うなら行つてもいいが結晶は常に持つとけよ？そろそろ終盤に差し掛かってるんだワンチヤン扉が閉まるつてこともありえるかもしんねえ」

「わかった…それじゃあ行くぞ」

「ここが……」

「さてさつさと下見して早よ帰ろうぜ。正直めんどくなつてきた」

「そんなこと言つてないで気を引き締めて、何があるかわからないんだから」

「ういーす」

「はは、……じゃ開けるぞ……」

「ういーす」 ギイ

おおーこれはなかなか迫力があるな……さてあいつの武器はあの剣だけか……けど盾持ちが相当いりそうだな……あとは行動パターンをみてやるか……

「グラアアアアアア!!!!」

「き……きやあああ!!」

「う、 うおつ!!?」

「え、 なんで!!? 見ないの!!? 行動パターンとか見ないの!!? ちよつまつ!!? アスナ離せ!!? 一人で走れる! その手を離せえええ!!」

「のままかなりの距離引きずられた

「俺の速度は止まんねえからよ……おまえらも…止まるんじやねえぞ……」

「おいっす、☆どうもカイトさんだよ、☆

今何してるかというと

「あ、あははは、いや、走つた走つた走つたW」

「走つた走つたWじやねえよ、もう少し走つてたら俺のHPが無くなつてたぞ!!? おまえらほんとに俺のことをなんだと思ってんだよ……」

「でもカイト君わたしが掴んでなかつたら戦う氣でいたでしょ? 警戒しろつて言ったのカイト君だよ?」

「そりやそりやただけどさ……でも行動パターンは把握しておきたかつたんだよな……」「でも盾持ちは十人以上必要だつて事は分かつたんだからだいぶいい情報だろ?」

「……今回のボス攻略はなかなか骨が折れそうだね……そういえばまだお昼食べてなかつたね……そろそろ食べようか」

「ああ、そうだな」

「んじや俺一回街に帰るよ。昼飯持つてきてないし」

つとまあ、こんな感じにフロアボスの顔を拝んできた帰り道なんすよ（顔見て逃げ帰ってきた）

「……よ、良かつたら…い、一緒に食べない…………ダメ…かな…………？」

……俺もうここで死んでもいい……俺はもう止まんねえからよ……おまえらも…止まるんじやねえぞ……（だ、団長…………!!!!（主）

キボウノハナーツナイダキズナヲ

「……俺でいいならいいよ」

「ほんとに？ 良かつたらそれじやたべよ？」

えつ食べるシーンはだつて？ 見せるわけないじやん男の捕食シーンなんて需要ないじやん。つまりはカツトだよ（原点回帰）

「誰か来る……？」

「ん？ マジ？ ……あれクラインじやね？ てことはあれは『風林火山』の人たちだな」「お？ キリトとカイトじやねえか！ 珍しいなおまえらが一緒にいるなんて」

「キリトが迷宮区攻略を手伝えって言つてきたから手伝つてる」

「まあそなんだけど言い方が違うだろ」

「それは置いといて、クライインにアスナを紹介とかなくていいのか？」

「ああ、そうだな：クライインこいつは『血盟騎士団』の副団長のアスナだ」

「よろしくお願ひしますクライインさん」

「…………」

「あいクライイン、うんとかすんとか反応しろよ」ペシペシ

「は！お、俺はクライイン二十五歳独身です。よろしくお願ひします！」

「……焦つて変なこと口走つてんな」

「……なあキリの字なんでおめえの周りには女の子がいっぱいいるんだ!!？ 一人くらい紹介してくれよ!!？」

「まーた変なこと口走つてる……こりや相当女に飢えてんなん!!？ なんかそこまで多くはないけど人がこつちに向かつてきてるな……」

「私は『アインクラッド解放隊』中将のコーバツツだ。この中にボス部屋までマップを埋めてるやつはいるか？ いたら私たちに譲つてほしい」

「はあ？ おまえらマッピングがどれだけ大変かわかつて言つてんのか!!？」

「貴様らが有効活用できないから私に渡せと言つているのだ早く出したまえ」

「……ほらよしつかりとボス部屋までマッピングしてるやつだ。……その人数でボスに挑

もうとするなよ確実に死者が出るそれに…おまえらの部下はいまかなり疲れてると思うが気のせいか?」

「私の部下はこのようなことで根を上げる奴らではない!ほら!立て!休む暇などないぞ!では協力感謝する」

「何が協力だ…脅迫の間違いだろ…それにあいつらの方が有効活用できないだろ「カイト!なんで渡したんだ!!?」

「結局マッピングしてある場所は公開するつもりだつたんだ別に構わんさ」

「それより問題なのはあの人数でボスに挑むかどうかじやないのか?」

「それはないだろキリトよお、さすがに軍の奴らでもボス攻略はどれくらいやばいかわかるはずだぜ?」

「……念には念を…か…俺はあいつらの跡をつけてみる」

「それならわたしたちも行こうカイト君だけじゃ心配だから……」

「なら行くか今から行けば間に合うだろ」

なんか胸騒ぎがする…よくないことが起きるのか…?

「…………ぐわああ！」

!!この声あいつらだ！

ヒュン！

「!!？カイト!!？あいつが全力で走るつてことはよくないことが起きてる急ぎこう!!」

間に合えっ!!

ヒュン

ガツ！

「俺のスピードはみんなを守るためのスピードだ!!死なせてたまるかあ!!」

刀最大火力スキル 《天龍ノ太刀》

「オラア!!ぶつ飛びやがれ!!」

「グラアアアアアア!!」

よし少しだが吹つ飛んだ

「今のうちに転移結晶を使え!!」

「使えないんだ結晶が!!」

クリスタル無効化工リアか!!

「なら今すぐに扉まで走れ!!おまえらが外に出るまで俺が援護する!!」

「しかし……」

「うるせえ!! がたがた喚くな!! 早く撤退しろって言つてんだ!!」

「…くつすまない」

「グラアアアアアア!!」

「てめえの相手はこの俺だ羊野郎!!」 ヒュツ

ガン!!

「グラアア!!」 ブンツ!

「くつり!?」 ヒュン

ズザア

「やりやがるじやねえか……」

「後一撃も受けねえか……まずいな…やつぱあのスキルを使うしかねえか

「カイト！大丈夫か!!」

「ああ、もう攻撃は受けねえけどな」

「……カイト俺に十秒くれそこからはバトンタッチだ」

「OK十秒耐えりやいいんだな? やつてやるぜ、任せな」

「サンキュー、それじや行くぞ！」

「十秒もくれんのかありがとよキリト……俺ももう出し惜しみはしない!!」

ユニーケスキル 《抜刀術》 奥義二十八連撃 《雷切》

ズパン!!!!

「俺の速度（夢）が終わるつて……ええり!? ……俺の速度（夢）は終わらねえ

!!!!」

「待たせたな、ここからは俺のターンだ!!」

任せたぜキリト……俺はもう疲れちまつたよ……

バタツ

「…………ト、……ん！カイト君！」

ん？誰か呼んでる…？

「カイト君！わたしのことわかる！？大丈夫！？」

「あ、ああわかるよアスナ…どういう状況これ……？」

「途中で意識を失ったの……ほんとに大丈夫……？」

「ああ問題ないさただHPがないだけでな」

「にしてもカイト最後にやつたあのソードスキルなんだありや！？見たことねえぞ！」

？

「……ユニークスキル……発動条件は……知つてたら公開してるさ…」

「そう、だよな悪いな疲れてるのに質問しちまつて…」

「気にすんな、そりや知りたくもあるだろうよ。」

「…ありがとな、それじや次の層のアクティベートしてくるぜ。これからゆっくり休め

よ

「俺の方こそサンキューン」

「カイト君…しばらくわたしとコンビ組んでもらえないかな、あまり無茶して欲しくないの…ダメ…かな…」

「……その言い方はずるいぞ……もちろんOKだ。しばらくの間よろしくな、アスナ」

「うん、よろしくね！」

こいつの笑顔を見たいから俺はこいつからの頼み事は断れないのかもな

七十四層突破

デュエルの前の静けさつて異様に緊張するよね

おいつすく☆どうもカイトさんだよ～☆今何をしているかというと……

「引つ越してやる……絶対見つからない村に……」

「まあ、いいじやねえか。一度くらいは有名人になつてみても。どうだ、一度講演会でもやつてみちや。会場とチケットの手はずは俺が」

「するか！」

久しぶりにエギルの店にやつてきたリトが不機嫌なんですよくまあ昨日の事が新聞に載つてたからかな理由としては。：俺もだいぶ活躍したと思うんだけど一切載つてなかつた：それはそれで悲しいんだけど嬉しくもあるんだよな俺も目立ちたくない

はないし

「まずなんで俺だけなんだよ：カイトもヤバイことしてたろ：どうして俺だけ：」

「ザマア～ｗｗｗ最後はお前が決めたんだだからそりや目立つだろがｗｗｗ」 プギヤーｗ

w w （指差し）

「クソッタレが……」

「まあまあ……」（苦笑い）

バンッ！

「よ、アスナ…した？ そんなに慌てて…」

「なんか顔が青いけどなんかあつたんか？」

「どうしよう…カイト君…キリト君…」

「大変なことに…なつちやつた…」

「なにがあつたか？ 大変だことなんていつも通りだと思うんだけど…」

「昨日…あれからギルド本部に行つて、あつたことを全部団長に報告したの。それで、ギルドの活動お休みしたいって言つて、その日は家に戻つて…。今朝のギルド例会で承認されると思つたんだけど…」

「なにしてんだ…アスナ…それは承認されねえだろ…」

「団長が…わたしの一時脱退を認めるには、条件があるつて…。キリト君と…立ち会いたい…つて…」

「…マジで？ なんで俺も？ 俺は関係…ないつて言い切れるわけじやないけど…」

「そんなわけないだろ…はあ…」

「…そりやまあ、心当たりは多すぎるけどよ…はあ、さつさと行こうぜはよ終わらせ

てゆつくりしたい」

「……なら行きましょう！」

「アスナ、キリトと先に行つてくれ。ちょつち準備してから行く」

「？うん、わかつた」

なら早いとこ終わらせてヒースクリフのとこに行くか……乗り気じやねえけど……

「ういーす」ガチャ

「遅いよ！カイト君！」

「アスナ君、別に構わないさ。カイト君が私を待たせることは日常茶飯事だからね」

「カイト君！あれほど言つてるよね！人を待たせちゃダメだつて！何回も言つてるよね

！」

「まあまあいいじやねえか、それより話つてのはなんだヒースクリフ？」

「ああ、話というのはだね……カイト君私ど、デュエルをしないかい？」

「は？何言つてんだおめえ……それつて賭けデュエルつてことか？」

「話が早くて助かるよ。アスナ君の一時脱退を賭けるデュエルさ」

「……それはアスナ自身に話したのか……？」

「もちろん話しているよ。このデュエルにもし君が負けたら……君にはこの『血盟騎士団』に加入してもらう」

「……そうか……それで、俺がもし勝つたら？」

「アスナ君の一時脱退を認めよう」

「……わかった。その条件を飲もう」

「!? カイト君!? ?」

「……けど一つ言つておく」

「……何かね？」

「……手を抜いたら容赦しねえ。……それだけ言つとく」

「……わかつているさ、君がどれだけ強いのかも私は常々アスナ君から聞いているからね」

「……ならいい」

「それじやあ場所と時間は私の方から指定をさせてもらうよ。アスナ君にでも聞いてくれて」

「……わかつた」

68 デュエルの前の静けさって異様に緊張するよね

「バカバカバカ!!? カイト君のバカ!!? わたしが説得しようとしたのに!!?」

「そ、そんな怒んなよ。それにこれは俺のただ的好奇心なんだ。あいつの『神聖剣』に俺の『抜刀術』が通用するのかどうかってのが……」

「だからといって売り言葉に買い言葉でいいかないの!!? もう、決まったものは仕方がないし、カイト君が負けるとは思わないけど心配なのは心配なの。それをわかつてよ

……

「……わるい、あとお前の中では俺は最強なプレイヤーなのか?」

「……いいじやん別に、どう思つても……」ぽんつ

「そんな顔すんな、大丈夫俺は負けるつもりはないさ。いくら相手が強からうが関係ねえさ。全部ぶつ飛ばすそれだけのことだ」

「……カイト君……そうだよね……頑張つてね!!?」

「ああ、お前はそこで見守つてくれ。そんじや行つてくる」

激突！《神速》V S 《神聖剣》～可愛い人や美少女の頼み事つて大体断れないよな～

おいつすゝ☆どうもカイトでゝす☆今は何をしてるかというと…ヒースクリフとのデュエルをする前でござる。

「……どういう風の吹き回しだ……？……なんでこんな観客がいる……？……俺が負けると予想しての行動か……？」

「そんなつもりは一切なかつたのだがね、ギルドのみんなが手配して、やつたと聞いてい

る」

「……そうか……なら怒るに怒れねえな……なあ、さつさとやらねえか？待つてる時間がもどかしい」

「そうだな……そろそろ始めようか」

「……ああ、さあやろうぜ!!？」

キリトとのデュエルを見た後だからわかる…あいつの盾は硬すぎるのと攻撃にも応用できるつてのが一番厄介なところだ…そこをどう攻略するのかがこのデュエルに勝

つための鍵だろう……なら防がれる前に俺の出せる最高速で叩くか……おそらくソードス
キルを使つての戦いは俺が圧倒的に不利になる……それにこのデュエルの一一番注意しな
きやいけないところはあいつの剣が掠るだけでもデュエルが終了する……それくらい俺
は紙装甲なんだ……常にそのことを頭に入れて立ち回らないといけない……かなり無理
ゲー感がある……けどよアスナのためなんだどんな無茶でもやつてやる!!??

《デュエルスタート!!??》

「シツ!!??」ヒュン

ガキン!!??

「驚いた……まさかここまで早いとは」

「それに反応してるお前も馬鹿げてるだろ!!??」

「なんでだ!!??なんで反応できるんだ!!??俺の最高速でやつてるんだぞ!!??……なん
だこの違和感……ヒースクリフ自体は速度に追いつけていない……けど盾で防がれ
る……明らかにおかしいな……もう少し様子見がてら攻撃の密度を上げてみるか……

「フツ!!??」

ガキン!!??「まだ上がるというのかね……毎回君には驚かされるよ」

防がれるけどやれないわけじゃない……なら俺の最高火力で押してやる!!??

『抜刀術』奥義二十八連撃 『雷切』

「これで……決める!!?」

「オラア!!?」ズパン!!?」

「くつ!!?」

「あれだけやつてドローかよ……ほんと『神聖剣』は頭おかしいわ……」

「毎回毎回君には驚かされるよ……それで賭けのことなのだが……」

「ああそういうやこれ賭けデュエルだつたつけ…思い切り忘れてた」

「ふふ、仕方ないさ。あれだけ学ぶことが多いデュエルだつたのだからね」

「どうするさ俺は正直なんでもいいからよ」

「……なら、アスナ君の護衛を一週間してくれないかな?私たちのギルドではかなり攻略に行っているプレイヤーが多くてね、かなり人が少ない状況なんだ。それにアスナ君の一時脱退も認めるよ」

「!?そんなに簡単に言つていいいのか?」

「団長の私が言うんだ誰も咎めはしないだろう」

「アスナとか言いそなんですけどねー、あとこんなが団長でほんとに良かつたのか?
? 適当すぎやしませんかね?」

「まあ、お前が言うならそれでいいさ。そんじゃ俺は帰らせてもらうぜ」

「ああそれと」

「まだなんかあんのか？」

「一時脱退してもすぐに戻つてもらうことになるかも知れないからいつでも準備はしてもらいたい」

「？おう、わかつた。そんじやまたな」

「カイト君！しばらくカイト君のホームにいさせて！」

「なんだ突然。別にいてもいいけどそれって泊まるつてことか？」

「うん!!？」

うわあ屈託のないこの笑顔、心なしか凄くキラキラしてらつしやる。

「しかしなんで俺の家なんだ?」

「ただ単純に行きたい!」

「……はあ、わーったよ。ほれ早く準備しろ俺のホームに家具があんまないから買いに行かなきゃなんねえ」

「はーい!!?」

ガキかよ……まあ、そんなアスナも可愛いけどよせめてあんまり人のいるところで騒がないでほしいな。目立ちたくないんだよほんとに……

《神速》VS《神聖剣》引き分けで終了

なんか知らんけど親になつてた件について

おいつす／☆カイトさんですよ／☆

今何をしているかと言うと……

「フツ……！」スパン！

「……とりあえずこんなもんか……」

今は素振りをしているでござるまる。（作文風（二回目））

いや／＼あのヒースクリフとのデュエルで引き分けたのがすげえ悔しかつたからこ_{一週間くらい}イメントレして素振りしての繰り返しをして過ごしてたぜ

「……ふあ／＼。カイト君：おはよー！」

「…おう、おはようさん」

……この通り実はアスナとずっと過ごしてます。：いや何もしてないからな！？本當だからな！？それに俺チキンだから何もできんしな…悲しくなつてくるからこのくらいでやめよう……さて朝飯でも食べてこようかな

「カイト君今日は何をするの？いつも通り素振りとかして過ごすの？」

「それでもいいけど、今日はキリトが来るからあいつと話そうかなって思つてる」

「へえー今日キリト君来るんだー」

「なんか大事な話らしい。そろそろ来るんじゃねえかな」ピンポン

「噂をすればなんとやら。ういー今出ますよー」

「よつ久しぶりだなカイト」

「おうおひさ。にしてもわざわざなんで俺のどこまで来たんだ？メッセでもやりとりで
きただろ？」

「それなんだが……実はこの子がカイトに会いたいって……」

「へえ俺に会いたいってか……そりやかなりの変人だな」

「そうでもないと思うけど……それより話がずれたな。実はなその会いたいって子に
カーソルがないんだ」

「へつ？か、カーソルがない！？そんなことあるか！？N P Cでさえもカーソルがあん
だぞ！？」

「ああ、俺も最初は驚いたさ。それも含めて中で話さないか？」

「そもそもうだな…その子もずっと外に居させてるのは嫌だと思うしな」

「そういやこの子……何処かで見たことがある気がする……転生前に見てる気がする
転生……？！？転生前って……もしかしてユイか！？だとしたらなんで俺に会いたいんだ？」

「？どうしたの？カイト君難しい顔して」

「ん？ああ……その子のことについて考えてた」

「確かに……何処から来たのかな？教えてくれる？」

「わかんなーい」

「……なら、名前はわかるか？」

「？ユイだよパパ」

「パ……パパ！？」

「カイト……そういう趣味が……」

「カイト君……ちよつとあつちで話し合おうか……」

「ちよつと待て！？どうしてそうなつた！？俺何もしてないだろ！？アスナ待つてくれ
！？俺は何もしてない！？これは誤解だ！？キリト笑つてんじやねえ！？」

「なんで俺がこんなことになんなきやいけねえんだよ！？これはキリトの役目だろ！
？俺関係ねえじやん！？」

「さて、冗談はさておき：ユイちゃん。ほんとにカイトがパパなんだね？」

「うん！あとママもいるよ！」

「へえー……それは誰なのかな力・イ・ト・君？」

「お、俺はしらねえよ！そもそも俺は女の子と親しい奴なんてリズとシリカとアスナぐらいだぞ!!?お前らも知ってるだろ俺が友達いないの!!?」
「じ、自分で言つて悲しくないのかそれは……」

「悲しいわアホが!!?」

「それでママつていうのは誰なのかな？」

「ん」

「おいまさか……」

「わ、わたしひ?」

「うん！」

「やつぱりか——!!?」

「ママー！一緒に遊ぼ！」

「え、えつあつうん。けど……」

「いいよ遊んできな。丁度キリトと話したいことがあつたから席を外して欲しかったし、……任せていいか？ユイのこと」

「うん…わかつた。じゃ庭の方に行こうか」

「はーい」

行つたか……

「さて、キリトなんとなく予想したこと言つていいか？」

「ユイちゃんのことか？」

「それ以外ありえんだろ。それで話を戻すけどお前……A I がこの世界に來たつて言つたら信じるか？」

「A I つてそんなことありえないだろ。突然何を言つてるんだ？……もしかしてユイちゃんのことか？」

「……ああ、俺の予想が正しければな」

「……その予想つてのは？」

「まずカーソルがないってことだな。NPCでもプレイヤーでもカーソルがあるんだま
ずありえないことなんだ」

「……確かに。俺は最初何かのバグだと思つてたんだが言われてみれば確かにそ
うだ」

「あとユイがもしAIならもしかしたらこっちに来るためのなんらかの装置みたいなも
のがあるはずだ。……明日それを探しに行こうと思つてる何か情報があれば教えて欲
しいんだ」

「……わかった。何かあればすぐに情報をお前に渡すよ」

「サンキュー。…さてとりあえずこれからの方針が決まつたな」

「ああ、かなり大雑把だけどな。というか最初に何処に行くか決めてあるのか?」

「まあ、最初だし始まりの街にでも行つてみようかなって考えてるさ。そこになければ
また別の場所を探しに行くさ」

「そもそもそうだな。それじゃユイちゃんをお前達に任せていいんだな?」

「問題ねえさ。こここの家にはアスナがいるからな」

「ふつ…それじゃ俺はお暇するよ」

「ああ、また暇なときにも来いよそん時は少しもてなしてやるよ」

「はは、期待せずに待ってるよ。それじゃーな」

「おう」

さて、これからまた大変なことになつたから慎重にいかねえとな……このことをアナにも伝えねえと……けどまだいいか……あんなに楽しそうにしてるんだからまだそつとしておいてやるか……

暇を持て余した《神速》の遊び

おいつすく☆カイトさんだよー☆

さて今何をしているかというと……

「なんか怪しそうな場所ねえかなー」

「そんな場所普通ないでしょ？ マップも全部埋まってるんだし……逆にある方が奇跡みたいなものだよ？」

「そうだけどさー……でも俺行つたことない場所の方が多いんだよなー……マップにのつてるやつの半分もいつたことないからなー」

まあ、気づいたらこの世界に転生してたから行つたことのない場所がありすぎるんだよな。もはや初めて行くみたいになつてるな

「でも確かにそこまで行つたことはないかもね……わたしもあまり行つたことがないところもあるし……」

「……まずは情報でも集めるか？……確かにここにもプレイヤーいたる？ そいつらに聞けばいいんじやね？ その方が手つ取り早い」

「……そうだね。 そうしてみようか」

はい、一層に来ております。なんでかつて？そりやシステムコンソールを探しに来たんだよ

　　でも正直始まりの街のこと何も知らないんだよなう転生してすぐにここを離れたから訳ワカメなんだよなうでも高い建物とかあるからそこに行けば人くらいいるだろ：逆にいなかつたら終わりつて感じだな

「パパー抱っこしてー」

「あー、はいはい。おいでー」

「わーい」

「よつと」

　えーアスナだけじやなくユイも来たんだよなう…なんでかつて？ユイが「パパとママが行くなら行きたいー」つて言い出してさ……断れる訳ないやろ!!?あんな子を一人にさせることなんて俺には出来なかつたさ!!?……こんな熱くなるつもりじやなかつたけど熱くなつちまつたスマンスマン

　　でもほんとあんな小さい子に言われたら断れないんやなーって思った
……親バカつてこういうことを言うんじやねえかな……?

「……」こつて教会だよね？」

「そうだな。教会だな。それがどうした？」

「……ここに人が住んでるの？」

「住んでるだろ。じゃねえと住む場所が宿屋しか無くなる。そこに泊まるにはコルが必要になるだろ？ でも稼ぐにはクエストをこなすかフィールドに出て狩りをするかの二択だからそれより簡単に且つあまりコルがかからない場所が必要で最適なのがここなんじやないか？」

「確かに……言われてみればそうかも……」

「パパ……あそこに誰かいる」

「あそこに？」

「路地裏に？ 何かがあるのか？」

「カイト君……行つてみよう」

「ああ……その前に…ユイを頼む」

「うん。任せて」

さて、何をこそそぞしてゐるのかしらねえけど楽しそうなことしてゐるんだつたらお兄さんも混ぜて欲しいな」

「おい、早くその武器を渡せよその金もだ」

「ダメだ！これは生活するためのお金なんだ！あんたらに渡してたまるか！」

「このガキ……言わせておけば……痛い目にあいたいようだな」

「くつ！」

「おいおいおい、大の大人が子供相手にカツアゲですかこのやろー。ここもだいぶ治安が悪くなつてゐるなあ」

「ああん？誰だテメエは……じや見ない顔だな？」

「そりやそりや、こここの街には住んでねえからな。話を戻すけどあんたらほんとに何やつてんだ？見たとこ軍の奴らか？」

「ほう？それを知つておきながらこの俺らに楯突いてくるのか？命知らずの奴だなw」「へえく、じやあ逆に聞くけどさ……俺のことしらねえの？みんなから『神速』って言われてんだけどさ……聞いたことない？」

「は？こんな貧相なとこにあの攻略組が来る訳ねえだろ。バカかお前」「バカなのはお前らだよ」チャキ

「あ？なんだやろうつてのか？」

「おう。というより俺にとっちゃ遊びだがな。ソツコ一で終わらせてやるよお前らが認識するより早くな」ヒュン

「は？そんなことできる訳ないだろw笑わせるなw」

「なあ、あんた腕は？」

「は？腕？はあ!!？なんで俺の腕がねえんだ!!？」

「言つたろ？『お前らが認識するよりも早く終わらす』って……あんたは舐めすぎたんだよ……ここが一番低い層だからって強い奴が現れないってそう思つて今まで生活してきたんだろ？それに自分はレベルが高いからっていう理由でレベルの低い奴を脅して金なり武器なりを奪つてきたんだろ？そんなゴミに俺が負ける訳ねえだろ……軍の

偉い奴に伝えろ “お前らの好き勝手にはさせない次こんなことがあつたら《神速》が潰しに行く” つてな…わかつたら帰れ」

「「ひ、ひいいい」」

「つたくお前ら大丈夫か?」

「「か」」

「か?」

「「か、カツケエエエエ!!?」」

「うお!!?」

「なんだよ今の!!? どうやつたんだ!!? どうしたらそんな強くなれるんだ!!?」

いや、俺がなんだよ!!? なんでそんな元気がいいんだよ!!? そんなかっこよくもないだろうに……

「お疲れ様カイト君。相変わらずすごいね」

「パパーかつこよかつたー」

「お、おうありがとな。……そだお前ら教会に住んでる奴らか?」

「うん。そうだよ」

「ならそこに大人の人とかいるか?」

「うんいるよ」

「なら話がしたいから案内してくれないか?」

「うん。わかつた」

「ふう、とりあえずこれで情報は手に入るか……有力かどうかは置いといて……」

「兄ちゃんたちこつちだよ!」

「おう、今行くさ」

「カイト君」

「ん?なんだ?」

「……もし情報が有力じゃない場合どうするの?」

「それは……俺が今まで各層の行つたことのない場所に行こうと思つてる……だから相当時間がかかるかもな……」

「そうだね……」

「どうした?急に」

「……なんか嫌な予感がして」

「大丈夫何かあれば俺が守る。アスナだけじやないユイも他のみんなも俺が絶対に守つ

てみせるさ」

「……うん。くよくよしてもしようがないよね……それじゃ早くあの子たちを追いかけましょ」

「そうだな……」

さて、俺にはあんまりSAOの記憶がない…というより転生前の記憶が曖昧になつてきている……ここで的生活に適応してきてるつて感じかもな…それでも変わらない気持ちはある

「アスナ……お前だけは絶対に守る」

親の気持ち～実際に親になつたことないからわからんけど～

おいつすく☆カイトさんだよ～☆

さて、今何をしているかというと……

「おりやあああ!!?」スパ・パパン!

「パパー頑張つてー!」

「よつしやーー！ いつちよいくぜ!!?」(ベ〇ツト&ゴ〇ータ風)

「えつと……大丈夫なんですか……?」

「ええ……もうあれは病気みたいなものですから……」

「誰が病気じやアホ」

「あ、もう終わつたの？」

「おう。ここら辺あんま手応えがなくておもんないわ」

「それはカイト君が強すぎるだけでしょ！」

「パパかつこよかつたです！」

「おう。ユイも応援ありがとな」ナデナデ

「えへへ」

可愛い（確信）……っと話がずれたな。システムコンソールを探しに今はダンジョンに来てる。というか今会話に混ざつてたけど……名前なんだつけ？まあ忘れたけど：その人の目的がこのダンジョンに幽閉されてる人を助けたいんだと……まあダンジョンモンスターのレベルが高いから助けてくれつて言われてな……ほら俺つて断らない体質だから……（激突！『神速』VS『神聖剣』を参照）まあ二つ返事しちやつたよねつて話（閑○夫風）

さて、俺の転生前の記憶が正しかつたらこのダンジョンにシステムコンソールがあつたはずだ。……システムコンソールの前にすげえ強えモンスターがいたような気がするけど……まあ気がするだけだろ。気にしない気にしない（思考放棄）

「……、こが一番奥なのかな……？」

「なんじやねえか？もう進めるところないし……」

「!!?.?.いた！……おーい！助けに来たぞー！」

「ん？なんか慌ててる……？なにかいるのか……？それほどまでに強大な力を持つたモンスターが……」

「…………そこから離れろ!!?.殺されるぞ!!?.」

「!!?.まざい!!?.今すぐ避難しろ!!?.」

「やべえぞこいつ……九十層くらいのモンスターじゃねえかこいつ!!?.カーソルが赤い……？つてことは今の俺なら少し無理すれば倒せる……？……やってみる価値はあるか……？」

「?カイト君……?」

「アスナお前もユイを連れて避難しろ……多分あの人�이 있는 장소なら安全なんだろう……俺がなんとかする。頼むぞ……」ヒュン

「ちよつと……カイト君!!?.」

「オラア!!?.こつち見やがれこの骸骨野郎!!?.」ガキン！

「G a a a a a！」ブン！

「うおつ！あぶねえなこんちきしよう!!?.」ヒュン

「思い出せ……あの時の感覚を……ヒースクリフとのデュエルの時を……！」

「まだまだ終わらねえぞ!!? こんなんでくたばつてたまるかあ!!?」ズパンー¹
「G、Gaaaaaaa!」

うし！ダメージは稼げてる……

「……俺の最高火力をてめえに叩き込んでやる！覚悟しやがれ!!？」

《拔刀術》 奧義二十八連擊 《雷切》

「てめえに……！ 受け切れるかあ!!？」ズパン!!?

G
a
a
a
a
a
a
a
a
!!?
—

まだ終わらねえのか!? 相当タフじやねえかこの野郎……！ダメだ！『雷切』の反動がでかすぎて動けねえ……！くそつ！早まりすぎたか……！

「!? ユイ危ない!!? 今すぐそこを離れろ!!?」

「大丈夫だよ、パパ……すぐに終わらせるからね……」ボワツ

「!? ユイ……お前……」

「はああああ！」ジユツ！

すげえ……綺麗だ……

「カイト君!!?」

「アスナ……」

「もう！無茶しないでよ!!？わたしがどれだけ心配したのか分かつてゐるの!!？」

「うつ……わ、悪い……カーソルが赤かつたから少し無理すればいけるのかと……」

「仕方ありませんよ。パパはそういう人ですから」

「!? ユイ……そうか……もしかして記憶を取り戻した……？」

「はい……システムコンソールに触れた時に記憶が戻りました……」

「……なあ、ユイ……はさ、ほんとはキリトのどこに行くはずだつたのか……？」

「はい……ほんとはキリトさんのメンタルケアをする予定だつたんですけど私が行く前に必ず精神状態が安定するんです。……パパ：いえカイトさん。あなたの行動でキリトさんの精神が安定するんです。その理由を知りたくてカイトさんに近づきました」

「そんなことがあつたのか……確かにあいつが落ち込んでたら結構な頻度で声をかけてたけど……」

「そんなことがあつたのか……それと別に他人行儀にならなくてもいい。俺たちは家族だろ？ それならいつも通りパパやママでいい：なんなら敬語も外してもくれ」

「ありがとうございます。パパ。でも敬語は癖になつてるので無理ですけど……パパ私はもうあと少しで消えちゃいます……ですからいつまでもママと良好な関係を……」「バカなこと言うな！ 絶対に消えさせるか！ 僕たちは家族だ！ これからも続いてくんだ

！この関係をたつた二日で終わらせてたまるか！

どつかにあるはずだ……システムコンソールの中に必ず抜け道があるユイを消させてたまるか！……!!「あつたこれだ！」

「これでどうだ！俺のナーブギアにユイの魂を残させたこれで残つたろ？」

「はい！……ですが権限がない状態なので疲労がたまっちゃいました……休んでていいですか？」

「ああ、構わねえよ……ユイは頑張つたそれ以上でもそれ以下でもないゆっくり休んでてくれ……」

「カイト君……ユイちゃんは残つたんだよね？」

「ああ、問題はないはずだ。これで一件落着だ」

「これでユイのことは終わつた……けどまだやるべきことが残つてゐるそれは……ん？メツセ？一体誰から……は？偵察隊全滅？」

色々考へても分からぬもんは分からぬ～但し考へることはみんな辞めないで～
ことはみんな辞めないで～

おいつすゝ☆カイトさんだよ～☆

つていう軽いのは置いといて…今何をしているかというと血盟騎士団のギルドハウスに来ている…昨日キリトからメッセが来て”偵察隊が全滅”したらしい…キリトも実際に見てないからなんとも言えないそうだがヒースクリフから連絡が来たから多分そうなのだろうと思つてゐるらしい。…俺も今からアスナに連れられてヒースクリフのどこに行く予定だ……おつと考へていたらもう部屋についたらしい

コンコンコン

「入りたまえ」

「失礼します…団長今戻りました…」

「ああ、ところで…偵察隊全滅については聞いているかな？」

「はい…一体どういうことなんですか…？…その話は本当なんですか…？…」

「ああ…本当だとモ…私も認めたくはないのだがね…そこでわかつたことがいくつか

あつてだね君たちに話しておこうと思つて呼んだのだが…」

「何を躊躇つてる？早く言つてくれ……その情報で俺がどれだけ動けるかが変わるからよ」

「そうだね……まず今回もクリスタル無効化空間だと私は思つてはいる。偵察隊とは別に他の人員を向かわせたのだがその人員も“全滅”した：そのことを踏まえて私はクリスタル無効化空間だと予想している」

「そう……か……」

「そんな簡単に“全滅”するか？仮にも最前線で戦つてる人たちだぞ？……もしかしたら……」

「……なあ」

「ん？なんだね？」

「……もしかしたらボスの攻撃力：今までのより高いのかもしんねえ……」

「……どういうことかな？詳しく述べてくれないかな？」

「……仮にも最前線で戦つてる人たちなんだそれなりに装備は整えてるはずだ：それに偵察隊つてことなんだ今まで以上に装備を整えるはずだろ？そんな簡単に“全滅”するのかつて話だ」

「……つまりボスの攻撃力が上がつてていると思うのかね？」

「……端的に言えばそうだな。けど正直なところ分からん。直感で言つただけだ」

「そうかその考へ方は氣づかなかつた。カイト君の意見を踏まえて攻略会議の時にみんなに伝えよう」

「そうか。なら帰つてもいいか？ レベリングもしなきやならん」「ああ、構わない。攻略会議にも出なくとも構わない」

「？ なんでだ？ 一応攻略会議にも出た方がいいだろ」

「ここまでしてもらつているのだからあとはこちらで君を活かせるようにしておく。だから君にはレベリングを頑張つてほしい」

「お、おう。なんかよく分からんけどどりあえず頑張るわ」

「フツ。期待しておくよ」

「んじや、失礼するぞ」

何を期待してんのか分からんけどアスナを守るくらいには強くならねえと…何かあつてからじや遅い…それと百層のボスにも通用するようなしつかりとした戦術が必要だからこの機会にいろいろ試してみるか…（但し書くとは言つてない）

「…うし！ そろそろ行くか！ ここで考へてもしようがねえさつきと行くか！」（大事なことなので二回言いました）

次回へ続く……

久しぶりにやるものは大体忘れる

おいつすく☆カイトでごわす☆

さて今何をしているかというと……

「つし！準備もできたしそろそろ行くか」

さあここでわかつた人はいるかな？多分いないと思うけど正解は……バス部屋に向かうでした！すいません調子乗りました……ここ最近はなかなかボケれてなかつたので久しぶりにボケて舞い上がつてました：

さて、茶番は置いといて……そろそろみんな集合するところかな？んじやあんまゆつくりしてると置いていかれるからさつさと行くか！

「お！カイトじやねえか。今回は遅かつたな。みんな揃つてるぜ？」

「おつすおつすおつすおつすおつす」

「いやおつすおつすうるせえなお前」

「おつすオラ野○雅子のマネをするアイ○ンテ○ティ田島のマネをするカイトだ」

「クウォーター・ポイントのボスなのに気楽だなお前…」

「うるせえなぶつ○すぞーこうでもしねえと現実逃避できねえんだ！オラの気持ちわかつてんのか？ぶ○殺すぞ！」

「さすがにこの世界でそのジョークはダメだ！今すぐやめろ！」

「へーいそろそろやめますよー」

「にしても気楽すぎないか？お前…こつちはどうなるのか心配でしかないのによー…」

「さつきも言つたら？現実逃避だよ。氣負いすぎたら気持ちが負けてる氣がしてな」

「だからといつてふざけていいとは言つてないだろ…」

「まあんだけどふざけくなつたんだよ仕方ないだろ。こんだけ空気が殺伐としてんだ

こつちも気持ちが落ち込んでくるわ」

「そりやそりやそりやそりやそりやそりやそりやそりやそりやそりや…」

そういうや俺の立ち位置ってどこだ？攻略会議に参加してないから何もわからんのだが？

「なあクライン。俺の立ち位置って「あ！カイト君ようやく見つけた！」お、おう。わりいクラインなんでもない」

「おうなんかあつたらまた呼べ」

「ああそうさせてもらうぜ。そんで？なんで俺を探してたんだ？アスナ」「うん攻略会議で話し合つてねカイト君は団長と組む方針になつたんだ」「……ヒースクリフとか……わかつたやるだけやつてみるわ」

「うん……でも危なくなつたらすぐ下がるんだよ？」

「お前は俺の母親か！大丈夫心配すんないぎとなりやヒースクリフの盾に隠れるさ」

「それはそれでどうかと思うんだけど……」

「ま、安心しろ盾に隠れはしねえけど無理しない程度に頑張るつもりだ」

「それならいいんだけど……団長にも迷惑かけないようにな？」

「だからお前は俺の母親かつて！つとそろそろ行くみてえだ自分のパーティーに行き

な

「うん……」

「ん？なんか元気がなさそうやけど大丈夫かいな？……あんまり考えないようにしてよう

・今はボス戦にだけ集中するか……

「諸君よく集まつてくれた。これからボス戦に入る。集中して望むようにしてくれ。
……それでは諸君武器を構えてくれ。これからボス部屋に入る！準備はいいな！」

「「「おう！！？！」」」

「それでは行くぞ！」

いよいよ始まるんだな……現実に帰るまであと少し……これに勝てば後25階……
ん？何か忘れてるような……何か大切な何かを……

次回に続く……

舞い戻りし神速前編

おいつすゞ☆超お久しぶりのカイトさんだよゞ☆ん?メタイつて?ソ、ソンナコトナ
イヨ(確信犯)
さてさてさて今俺はなにをしてるかというと…

「総員いつでも動けるようにしておいてくれたまえ」

「「「おう！」」「「「はい！」」」

……この通りボス部屋に入つたところですよ。はあ～マジで憂鬱だぜボス攻略つてのは……」

「それは私も同感だ。しかしボス攻略をしなければここから脱出するのはできないだろう？」

「そうだけどよ……あり？もしかして口に出てたか？」

「ああ。ガツツリとね」

「まあ別に聞かれて悪いやつじやねえからいいけどよ……にしてもお相手さんはまだ出てきてないのか？」

「そのようだね……もしかしたらステルス能力があつたりするのかも知れないね……」

「……いやそれはねえだろ」

「…ほう？何故そう言い切れるのかね？」

「仮にあつたとしたらすぐ俺たちを全員殺れるはずだぜ？そんな能力今更だろ。こんな

上層部に来てから付けるもんじゃねえ・俺はそう思うぜ?」

「なるほど……ではボスは隠れていると? そう思つているのかい?」

「……ああ。隠れる場所があんまりないとこを見るとおそらく上に「上よ!」……ほらな
?」

「総員回避!」

「……うん。なんか…すまん…すぐに俺の考えを伝えれなくて……つてそんなことよ
りさつさとタゲを俺に移さねえとみんなバラバラになつて作戦が水の泡だ……
「……うし! いつちよ仕事しますか!」 ザツ!

「さてさてさてー！骸骨野郎オラといつちよやろうぜ！」

—graaaa!!?

「……フツ。やかましい野郎だが楽しくなりそうだ…!!?」

「ぐらあああああああ!!?」ブンツ!

「おつと。あぶねえな俺みてえにAGI極振りじやなかつたら当たつてたぞ。……さあどんどん攻撃してこいよ。一時的ではあつけどおめえの相手は……俺だけだ……」

卷之三

「よつ、ほつ、よつと。どうしたどうしたおめえの力はそんなもんか!!?」

つて言つたわいいものの正直こいつの攻撃……密度が今までのボスより濃いな……おそらくこのまま避け続けたら集中切らして当たつちまうな……早めにあいつらが整つてくれりや話は別か……ん？いや待てよ。俺から積極的に行けばよくね？（ござり押し）

「この作戦（脳筋）が通用すればいけんちやう？」

キタ！ マジ俺天才！
(変換ミス：天災)

「…しゃオラ！俺とスケベしようや!!？」 シヤキン！

「俺のスピードについてこれるか!!?」ズパツ!ズパツ!ズパツ!

「gaaaaaaa!!?」

「こんだけやつてゲージ一本のうち十分の一か……よくよく考えたらヤバくね？（今更）：何がこの作戦通用するだよ：筋金入りのバカだつたわ俺（今更）

「すまないカイト君!!？遅くなつてしまつた!!？」

「遅せえわバカタレ危うくちよつと間違えたら死ぬとこだつたわ!!？（自業自得）

「それはすまない！何かお詫びをしなくてはね」

「それよりちよつとした情報をお前に教える一回しか言わねえからよく聞いておけよ」「ああ。頼む」

「とりあえずあいつの攻撃の手段としてはあのデケエ鎌。後はやつぱり今までのボスと違つて攻撃の密度がちよつと濃いってことぐらいだ。俺がタゲもらつてる時はそんな感じだつた。戦つてる最中にまだ俺が知らない行動も出てくるはずだからそこを考慮してくれ」

「……了解した。ではカイト君は少し回復してから攻撃に加わつてくれ」

「……オーケー。出来るだけ早めに戻る：それまで持ちこたえてくれよ？」

「……ふふ。もちろんそのつもりさ」

「回復してる最中に少しでも奴の行動を頭に叩き込んでおくか……その方が俺的にはやりやすそうだしな……しかし……」

「……変な胸騒ぎがする……」のまま何もなきやいいけど……」

to be continued....

舞い戻りし神速中編

変な胸騒ぎは確かにする……けど今は相当順調に削れてるはずなんだけどな……

「……どうにも胸騒ぎが晴れねえ……」

さて回復は済んだしあとはちょっとボスの観察でもするか……にしてもやっぱ攻略組つてのは強え奴ばつかだな……ほぼ攻撃をもらつてない：HPが減つていたとしてもガードした時の削りダメージぐらいか……このまま何もなく平和に終わってくれりやいいんだけどな…………だいたい把握できたし早く戻ろうかね／あいつらにLA取られたくないしな

「…………うし！さつさと戻つて殴りに行こうかね」

「うわあああああ！！？！」

!!?なんだ今の悲鳴!!?

パリン！

「…………は？」

まさか……誰か死んだのか…………でもほとんどの奴らはHP減つてなかつたよな…………？タンクの奴ら以外HPは満タンだつたはずだろ？まさかこの胸騒ぎつて……

!!?

「……」いつがワンパンできる攻撃力を持つてるっていう知らせ……?』

それより早く戻らねえと……このままだと隊が崩れて……。

「……全滅しちまう……!!?』

それだけは絶対にダメだ!ここで全滅したら……!

「誰もこのゲームを攻略する人たちが集まらない……!!?』

それをさせねたために俺は何ができる!? 全員に撤退を命令するか?……そんなん出来るわけねえ……ここはクリスタル無効化工リアだ……転移結晶なんて使えるわけがない……それに撤退するには殿を誰かがやらなきやなんねえ……それを出来るやつなんてこの場にはそこまでいねえ……強いてあげるならヒースクリフぐらいだろう……確かにあいつならなんとか出来るかもしけねえ……けどあいつ自身どうなるかわからん……ならどうするか……んなもん考えなくとも出てきたじやねえか……

「…………命懸けであいつをぶつ飛ばすしかねえみたいだな…………」

もう一度呼び覚ませ……ヒースクリフとデュエルしたあの時の感覚を……あの感覚がありや【スカル・リーパ】の一泡吹かせられる……!

「うわあああああ!!?」パリン!

「クソ!なんなんだよこいつ!!?あいつらのHPは満タンだつたんだぞ!!?」

「g r a a a a a a a a !!?」ブンツ!

「うわあああああ!!?」パリン!

「テメエ!!?よくもあいつらを!!?絶対にぶつ殺してやる!!?」

「!!?迂闊に近づくな!!?今すぐ離れろ!!?」

「うおおおお!!?」ブンツ!

ガキン!

「何!!?弾かれた!!?」

「g a a a a a a a a !!?」ブンツ!

(ここで死ぬのか俺は……) ガクツ

「避けろ!!?今ならまだ間に合う!!?」

(無理だ……これを避けられたとしても次いつまた殺られるかわからない……それなら

いつそ早くあいつらの元に……）

「諦めていいのか？そんな簡単によ」ガキン！
「え？」

刀最大火力スキル《天龍ノ太刀》

「g a a a a a a a !!？」

「……今まで死んでいった奴らの仇を討ちにきた……すぐにへばんなよ？」
【スカル・リー】
パ……！」

t o b e c o n t i n u e d ……

舞い戻りし神速後編

「……今まで死んでいった奴らの仇を討ちにきた……すぐにへばんなよ？」「スカル・リー
パ」……！」

つて言つたものの結局は作戦を練つてはねえんだよな……俺一人だけで殺やれるほど弱い相手じやねえのはわかつてゐ……なら……」

「……ヒースクリフ…アスナ…みんなをまとめる。そして勝てる作戦を練れ。作戦を練つてる間こいつは俺がなんとかする……」

「それじやカイトくんが……」

「……安心しろ。俺は死なねえ。現実に戻るまで絶対に……」

「……任せてもいいんだね？」

「……あたりめえよと言いたいところだが：正直そこまで長く保てるわけじやない……な
るべく早くしてくれ」

「……了解した」

「……気をつけてね」

「……おう。任せろ」

「さてつと…さあ、今度は俺とやろうぜ!!? 今度は手加減なしでやつてやるよ」
「g r a a a a a a a a !!?」ブンツ！ブンツ！ブンツ！

だいぶ冷静になれたからかわからんがあいつの動きが読めるようになつてきた……
右…下…斜め右上に流れるように切り裂く…大体の攻撃の派生がこれから成り立つて

る……つうことは……

「……左がおろそかだぜ!!?」

刀五連撃 『雷禅』

「g a a a a a a a a !!?」 ドスン!

!!? 転倒か!!? 一気に仕掛ける!!?

「オラア!!?」

『拔刀術』 奥義二十八連撃 『雷切』

「g r a a a a a a a a !!?」

よし!!? だいぶダメージは稼げた筈だ! HPバーは何本削れてる!!?

「二本と半分…………」

やつぱ一人だとそこまで削れねえか……せめてもう少し人出がいたら……!

「カイトくん!!?」

「!!?……へつ。ようやくかよ:おせえぞお前たち……」

「ごめんね……ちよつと遅くなつちやつた……」

「これでもだいぶ早くしたのだがね」

「はつ! こつちは1人じや手に負えねえやつを一人でなんとか凌いでたのによ……よく

言うぜ……それで? まとまつたか?」

「ああ。カイト君がここまで削ってくれたおかげで作戦の成功率が大幅に上がったよ」

「…で？その作戦ってのは？」

「それはね…………」

「……マジで言つてんのか？」

「ああ。おおマジさ」

「……お前らしからぬ作戦だな……」

「それは私も思つたさ。しかし、これ以外に方法が見つかなくてね」

「……まあ正直これが一番妥当だな……」

「それじゃあカイト君は回復が済んだらすぐにして……」「いや俺も今行こう」……君は今あまりHPがないのだよ?」

「回復なんてもんは必要ねえ……その作戦なら回復しなくても問題はない。それに

……」

「それに?」

「回復なんぞあいつとの決着を終わらせてからでいい……今はあの骸骨野郎をぶつ飛ばしてえ」

「フツ。君は本当に面白い」

「うるせ」

「ふふつ」

「……おい。アスナは笑うなよ」

「ふふつ。ごめんね?でもカイト君の調子がいつも通りになつてきて嬉しいんだよ?」

「確かにこのボス戦が始まつてから俺は気を張り詰めすぎてたかもな……うし!……ア

スナ最後一緒によろしく」

「え？」

「おそらく俺のソードスキルじゃ最後削りきるまでいかねえ。だからアスナに最後一緒にスキル打つてくんねえか？ その方が相手を確実に削りきれる……だから……」「うん！ わかった！」…サンキューアスナ

「よっしゃ!!？」いつちよ行くぜ!!？おめえら!!？」

（作戦としてはシンプルなものだ。私たちが少しずつ奴のゲージを削っていき最高火力を誇るカイト君のソードスキルで削り切ってくれないか？）

……本当にシンプルな奴だよ……けどそれのおかげで俺もだいぶ楽にやれる！

カイト君！ 決めたまえ！」

……サンギエヒースケリア……アスナ!!?』

うん!!?

「ハア!!?」ザシユ!!?

—graanaa!!?

「…………これで終わりだ【スカル・リーパ】…………俺の最強を持つててめえの最強を打ち碎く!!?
『雷……切』!!』ズバーン!!!!

「g a a a a a a a a a a a a a a !」
!!!!」 ドスン!!?

パ
リ
ン
！

「「「よつ…………しゃあ!!!!」」」

……ようやくか…………けどまだ上に階層があるって考えると……
「…………」れより強え奴がまだ「ころ」「ろいんのか…………」

「カイトくん…………お疲れ様」

「ああ。アスナこそお疲れさん」

「今日は流石に疲れたよー」

「だろうな。今までよりも頭一つ出て強かつたもんな…………」

……それよりも俺はなんか忘れてる…………何か大事な何かを…………

「ん? クライイン何してんだ?」

「あ? ああこれが? 今どれくらいプレイヤーがいないか数えてんだ……今日は見てるだ

けでも何人か死んでたからな…………」

「…………そう……か……それで何人いなかつた?」

「……大体十人ぐらいだな」

「…思つたより多いな」

「……それよりすげえよな『神聖剣』ってのはあれだけやつて黄色になつてないんだぜ？」

……HPバーが黄色になつてない？…んなバカな！？あれだけの死闘を乗り越えてなお黄色になつてない？

ドクン！

あ
あ。

そういうことか……ようやく思い出した……

チヤキ！

「？カイトくん？」

ダツ！

「カイトくん！」

「.....
よう。

.....久しぶりだな.....

茅場.....
」

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....
.....

激突！《神速》VS《神聖剣》完結編～勝利の女神はどちらに傾く～前編

「……よう。……久しぶりだな……茅場…………」ガキーン!!?

「…………何故わかつたのかね？」

「……お前まだ気づいてねえのか？……今まで自分がしてきたことをよく思い出せよ？」

「……一体どういうことかな？」

「……わからねえなら教えてやるよ……デュエルの時お前は重大なミスを犯した……そのＨＰが半分から減らねえシステムを使つたことだ……！」

「…………なるほど……確かにこれは私のミスだ……見破つたご褒美をあげなければね」

「なら今すぐこの世界にいる奴らを現実世界に返せ!!?」

「それは私を倒してからだ。もともと私は100層のボスなのだからね」ピッ
「カイトくん…………!!?」

「!!?アスナ！」

「な、なんだ!!? 体が急に動かなくなつた!!?」

「お前らまで……茅場! 一体何をした!!?」

「なに。このゲームの中で最も強い麻痺だ。私を倒せばなくなるよ。……カイト君、君には私とデュエルをする権利がある。さつきも言つたように私は100層のボスだ。倒せば残りの25層を攻略せずに済む。私を倒せばこのゲームは終わるようになつてあるからね」

「……………へえ。つつうことにはおめえをぶつ飛ばせば俺らは帰れるわけだな?」

「その通りだよ」

「やめろカイト! もしオメエが負けたら死ぬことになるんだぞ!!?」

「……いや俺はやるさ…サンキューなクライン心配してくれて。けど今戦えるのは俺だけ……それに俺はあいつとの決着をまだ着けてねえ……だから決着をつけたい」

「カイト……」

「情けねえな武士のくせによ…信じろおめえのダチをよ」

「カイト……」

「おいおいエギル。そんな暗い顔すんなや。別に俺は死に行くわけじやねえんだぞ?」

「……違えよ。おめえを止めれない俺に腹が立つてんだ。……どうせ言つたて聞かない

だろ？なら俺から言えることは……勝つて来いそれだけだ』

「サンキュ工ギル。絶対に勝つさ。勝つてお前らを現実世界に返す絶対にだ」

「カイト……ごめん』

「なうに辛気臭くなつてんだ？キリトさんよ～？別に謝られることなんてしてねえだろ？』

「違うんだ……自分がなにもできないから悔しいんだ：動ければすぐに剣を取るのに……』

「まあまあ。そう落ち込みなさんなつて。確かにそうかも知れんがよ：俺はおめえらがそう思つてくれるより応援してくれた方がより頑張れる。誰だつてそうだろ？まあその気持ちは凄えありがてえよ。だからおめえらは安心して俺の戦いを見守つてくれ』
「カイト…わかつた。お前の全力をぶつけて来い!!？」

「あたりめえよ』

「カイトくん……いつも君は自分勝手だよね……1層の時からずつとずつと一人で悩んで一人で自己解決して……私の誘いにも乗つてくれなくて……』

「……ん？なんか途中から俺のd i sになつてつてないか？」

「……ふふつ。……でもね私は、いつも自分勝手でちよつと子供っぽい……そんな君が……」

大好きです

「……アスナ…お前それリズに教えてもらつただろ？絶対にお前じやできねえからな
……」

「へへ。ダメだつたかな？」

「はあ。ダメじやねえけどよ…返事は後でする必ず……」

「うん。待つてる」

「はあ。……つうわけだ。負けられない理由がもう一つできた。だから俺は絶対に勝

つ。勝つてお前らの明日を手に入れる…………だから…………おめえらはその目を見開いて俺の勇姿を見届けてくれ!!?」

「「おう!!?」」

「さて……待たせちまつたな茅場……」

「別に大丈夫さ私は待つのは嫌いじゃないからね。それに負けるかも知れないからね最後くらい仲間との交流もいいだろうと思ってね」

「……絶対叩つ斬る。なんだつたら木つ端微塵になるくらいまで切り裂いてやる覚悟しろ茅場」

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

.....

激突！『神速』VS『神聖剣』完結編～勝利の女神はどちらに傾く？後編

「……絶対叩つ斬る。なんだつたら木つ端微塵になるくらいまで切り裂いてやる覚悟しろ茅場」

「ふふ。それじゃあやろうか」ピッ

「……デュエル？……なるほど……全損決着のデュエルか……」

「どうしたのかね？まさか怖気付いたのかな？」

「フン！誰が怖気付くかよ。俺はただおもしれえと思つただけだ……！」
「それなら良かつた。では早速やろうか……」

「ああ……」ピッ

【ヒースクリフさんからのデュエルを承諾しました】

【後30秒で開始します】

あいつに下手な小細工は通用しねえ……それはわかってる…………けどなにも作戦なしじゃ話にならない……それにあいつはこの世界の製作者だ……ソードスキルの来る場所も把握してるはずだ…………だからこそ何か策があれば……！

は
そ
う
感
じ
た
…
…

ん?
ま
て
よ
…
あ
い
つ
は
俺
の
速
度
に
つ
い
て
こ
れ
な
か
つ
た
は
ず
…
前
の
デ
ュ
エ
ル
で

5
…
…

て、(1)とは
……
……
……
4

これならいけるかも知れねえ……なら……

2
……

もしかしたら……

3
……

1.....

「俺の最強（抜刀術）を持つて……てめえの最強（神聖剣）を打ち碎く!!?」

【デュエルスタート】

ザツ!!?

「先手必勝だぜ!!?」ヒュツ!!?

「その程度の甘い剣筋じや私を倒すことはできないよ?」ガキン!!?

「んなこたあ十分理解してるわ!!?」ガキン!!?ガキン!!?

クソ…まさか普通の斬撃に対応してるのは思わなかつた……前までは普通の斬撃でも微妙なラインだつたのによ……しつかりと対応してくるあたりほんとたち悪いな
……でもよ……

「今度はおめえが見切れねえ速度でやつてやらあ!!?」ザツ!

『拔刀術居合 紫電一閃』

ガキン!!?

ズザザー!!? 「……まさかここまで速いとは……それでいて重さもある…さすがだよ
カイト君…それこそ戦い甲斐がある…！」

「…まさか防がれるとはな……俺の出せる最高速度でやつたんだけどな…ほんとてめえ
の防御力は頭おかしいぜ……」

「そうでもないさ…1秒でも遅かつたらきつと負けていただろう…それにさつきので防
御したのにも関わらずHPがかなり減ったからね」

…つうことはラスト一撃くらいか……?なら……!

「これで決めてやる……！」

「かかつてきたまえ……！」

『拔刀術』奥義二十八連撃 『雷切』

ガキヤ!!?

「これで終わりだ……さらばだカイト君」

「馬鹿が……！誰がこれで終わりだつて……!!?」

『スキルコネクト』『拔刀術』七連撃 『龍仙剛撃』

ズパン!!?

「これで終わりだ……！」

「ああ、だがカイト君もだよ」

「……そうみてえだな……」グサツ！

「先に行つているよ」

「ああ」パリン！

「カイトくん!!?」ダツ！

「アスナ…お前どうやつて……？」

「愛があればなんとでもなるよ!!? カイトくん死なないで……!!?」

「はは、あんだけ言つといてこのザマだ…まだまだ俺も……」

「そんなことないよ……!!?」

「はは、サンキユ。……アスナ俺がまだここにいるうちにさつきの返事しとくわ」

「いなくなるみたいに言わないで……！」

「はは、すまんすまん。でも事実なんだ俺のＨＰはもうないまだここに入れるのは奇跡みたいなもんだろ。それで返事だけど……お前と付き合うことはできない」

「!?!?どうして?」

「そりやあこれから死ぬ奴と付き合うとか正気じやねえぞ？ それだつたらまだ現実に戻つて俺よりいい奴探せよ。そこらへんにうじやうじやいるから。その方が自分に

とつていいと思うぜ?」

「いやだよ……!・カイトくんじやなきやいやだよ……!・

「ありがとなこんな俺を好きになつてくれて……そろそろ全部の感覚が薄れてきたな
……」

「カイトくん!!?死んじやいや!!?」

悪りいな……もう耳も聞こえなくなつてきたし声も出せねえ……はは、転生して約2年
半か……たつた2年半しか生きてねえのか……それでも有意義に過ごせた……ありが
となここまで有意義に過ごせたのはお前らのおかげだ……それじゃあなお前ら……会え
る時があればまた会おうぜ

パリン!!?

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
.....
.....

エピローグつてやつさ

…………ここは何処だ？……確か俺死んだと思うのだが…………？とりあえず周りを見てみるか…………特に何もないな……ただ夕焼けの空が見えるだけか…

「目覚めはどうだい？カイト君」

「…………まさか…………茅場さん…………？」

「ああそうだとも」

「どうして…………死んだはずじゃ…………？」

「言つただろう？先に行つていると」

「…………なるほどな…………で？俺をここに呼び出した理由は？」

「せつかちだなカイト君は」

「そうか？でもよ正直氣になるだろ？もうそろそろで死ぬような人間を拘束しておいて」

「…………なるほど。君は死んだと思つたのかい？あの戦いで」

「そりやあな。ＨＰを全部削られたんだ当然だろ？」

「…………確かにあの時私は削り切つた。しかし、私のＨＰが無くなつてからだろ？」

「？まあそうだけど…それとこれとで話が別だろ？」

「まつたく君は……鋭いのか鈍いのかわからない時が時々あるな」

「へ？つまりどういうことだつてばよ？」

「結論から言うと君は死んではないと言ふことだよ」

「ふあ!!？マジで!!？」

「はあ……マジもマジさ。元々このゲームは私のHPが無くなつたら終わる仕組みだつたんだよ。つまり君より先に私のHPが無くなつてしまつた…そこでこのゲームが終わつたと言うわけさ」

「へえ～。そりやまたすげえ仕組みだな～。……でもそうちか……あいつらは無事に戻つたんか……」

「ああ。君の奮闘によりね」

「…………なあ茅場さん」

「ん？どうしたのかね？」

「あんたは今までいろんなゲームを作つてきたけどさ……」

何を求めてこれを作ったんだ?
」

「……ふむ。かなり難しい質問だね。……何を求めて…か…………私はね昔からそれこそ子供の頃からこのアインクラッドのような物を求め続けてきた」

「…………」

「そして、”それは”現実にはなかつた」

「…………」

「ならいっそのこと私の求める世界を作つてしまおうとそう考えるようになつた。そしてどのゲームを作つても私の目標は達成できなかつた」

「……なるほどな……子供の頃から追い続けてるつてことはあんたでさえも叶えれない夢　つてことだな……」

「いや私の　”夢”　は十分に達成された」

「?なんでだ?」

「チユートリアルの時に言つたはずなのだがね……」

「へ?あ、ああ今思い出した。そうかもうあん時に叶つてるつてことか」

「そういうことさ…………だがねカイト君。私はもう少し先の未来を見たくなつたんだ……このアインクラッドで」

「けどそれは叶いそうもないと思うが……?」

「大丈夫さ私がここに入れるように手を施してある」

「……用意周到なこつて」

「ふふ。……さて、長話をしすぎたかな。君ももう少しで戻ってしまうからね手短に話そうか」

「お? 他にもなんかあんのか?」

「ああ。君はこのS A Oの他にV R M M Oをやるつもりはあるかな?」

「ん? そудだな……やれるのであればやりたいが……」

「そうか……ならやはり君には渡しておいた方が良さそうだ」

「??なんのことだ?」

「今から渡すものはナーヴギアや他のゲーム機に使える代物だ。これをその機械に入れることによつて『ここで培つてきたスキル、ステータス、ある一部のアイテムは他のゲームに持つていける』そういう代物だ」

「はあああああ!!? ちよ、おま、そんなもんなんで俺に……!!?」

「私を見破つた報酬だよ」

「んな!!? 対価にみあわねえだろ!!?」

「これは私のお節介さ……君はこれからいろいろなことに巻き込まれる……そう思つたからこそれを用意した」

？」

「まあいいじゃないか。おそらくこれで幾分か楽になるはずだ」「フォローになつてねえよ馬鹿が!!?」

「はは。喜んでくれて何よりだ」

「……はあ。まあこれで俺の負担が減るのならいいや。ありがたくもらわせてもらうし、使わせてもらうさ」

「ああ。そうしてくれ……ああそれと」

「今度はなんだ？」

「もうそろそろでもう一人来るだろう。せめて別れる時ぐらいは一緒に居させてあげようと思つたものだからね。この世界が終わるまでゆっくり話してるといい」

「? 何を言つてんだ?」

「直にわかるさ。それではねカイト君。君には楽しませてもらつた」

「お、おう。あー! それと最後に言いたいことがあつたわ」

「何かな?」

「S A O面白かつたぜ!!?」

「ふつ。それは制作者冥利に尽きるつてものだよ」

「またな茅場さん!!..?」

行つたか……ほんとあの人は自由だな……さて

「一体誰が来るんかね?」

「カイトくん!!..?」

噂をすればなんとやら

「アスナ……」

「カイトくん!」ダツ!!..?

へ?なんか全力疾走してない?この距離で?さてはこれ……

「おい馬鹿やめろ！それは流石にS、グボオアアア!!?」

「良かつた……死んでないんだよね？」

「誰かがトドメを刺してこようとしてる人がいるのは気のせいですかね」

「良かつた……ホントに良かつた……」

「……すまんな悲しませるようなことして……でも俺はもうこの通りまったく問題ないさ」

「……グスツ。……ホントに?」

上目遣いやめてください死んでしまいます……

「あ、ああほんとに問題ないぜ……強いてゆうならお前をフっちまつたことかな」

「…なら」

「ん? どうした?」

「……ならさつきの返事言い直して」

「……ふあ!?」

「…わたしのこと好きじゃない?」

「え、いや、あの、そう、ではなくてです、ね？あのなんと言いますか…その…………好きです……」

「なら付き合つて」

「えーと……ほんとに俺でいいのか?」「どういうこと?」

「いや、あの、なんと言いますか……こんな冴えないやつでいいのかと……それに俺かなりヘタレチキン野郎なんで……その釣り合っていないと思いませんがそこのところはどうお考えになつておられますか……?」

「はあ……カイトくんつて変なところでちやんと考えてるよね」

ため息の後にまさかの俺のd i s s !!? これはたまらずカイト選手もダウンだ!! ?……一人で何やつてんだろ

「大体恋愛に釣り合う、釣り合わない関係ないとと思うんだけど? 好きになつたらそれでいいじやん。なんだつたらわたし達両想いなんだよ?……それにわたしはカイトくんじやなきややだ……」

おおーとここでまさかの恋愛の定義を語り始めたと思つたら俺じやなきややだ宣言だー!!? これは流石のヘタレチキン野郎童貞のカイト選手もKOだー!!?……自分で言つて泣けてくるなあ……つとそれより返事しなきやな……俺も覚悟を決めよう

「……わかつた。アスナ……俺と付き合つてくれ……」

「!?!? うん!……うん!!? これから末長くお願ひします!!?」

「……それはそれで違うんじゃないかな」とカイトさんは思うわけですけど……まあお前

が幸せならそれでいいさ』

「そもそもこの時間も終わりそうだな……後どのくらいここに入れるか茅場さんから何も聞いてないけど……なんとなくそんな気がする

「……なあアスナ」

「ん? なに?」

「おそらくもう少しでここに居れる時間も終わる」

「そう……だね……」

「だからその前にな……せめて現実での名前を教えてくれないか?」

「え?」

「お前の名前を知らなかつたら会いに行けないだろ……恥ずかしいこと言わせんな

「ふふ。うんわかつた。:わたしの名前は『結城明日奈』十七歳です」

『ゆうきあすな』オッケーちゃんと覚えた……

「じゃあ次はカイトくんだね」

「おう……俺の名前は『神居刀矢』俺も同じく十七歳だ」

『かむいどうやくん』うん! わたしもちゃんと覚えたよ!』

「にしても現実の名前をそのまま使うつて……」

「それはだつて:わたしあんまりゲームしたことなかつたんだもん! それに刀矢くん

だつてあまり言える立場じやない気がするけど?」

「それはそうだけどよ……」

「「ふつ。あははは!!?」」

こんなに笑つたのはいつぶりぐらいだろうな……実際は最近のことかもしんないしそうしやないかもしない……けどこれだけ言えるのは腹の底から笑つたのは久しぶりだ……つとそうこうしてるうちにか……

「もうそろそろだな」

「そうだね」

「次に会う時は現実でつてことでいいか?」

「うん!」

さくて久しぶりの外だ! 一体俺の周りがどうなつてんのか気になるとこだな……うし!

「んじやあまた後でな」

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

.....

A L O 1

プロローグという名の駄文

おいつすく☆みんなお待ちかねのカイトさんだよ☆え？誰も待つてないつて？

……泣いていいかな？久々にこのノリでやつてスルーされるのは悲しくなつちまうぜ
……

さて、話は変わるけど今俺は何をしてるかつつうと……

「はつ！はつ！はつ！」

……別に変なことしてるとわけじやないぞ……じやあ何をしてるかつて？走り込みだぜ

☆

あのゲームが終わつてから“もう三ヶ月”は経つてるしな……え？その間何をしてた
かつて？……全くしようがないな（トラン○ス風）結構ざつくり説明するぞ？

まず起きてから俺の右手には茅場さんからもらつたあのSDカードみたいなもんが
握られてたこれはおそらく……というか十中八九俺の“スキル”たちだろう……それに
はあんまり驚かなかつたけどさ……その二日後にまさかの出来事があつた……その出来
事つつうのは……

「あ！兄ちゃん！走り込みお疲れ様！そろそろお昼にしよう！」

「ああ……そうだな……正直もうちよつと走りたかつたんだけど……時間も時間だしな昼飯にするか……”木綿季”」

「やつた～！久しぶりの兄ちゃんのご飯だ～！」

……はい。今ので理解した人はおそらく大半の人がそうだろう……まさかの病気が治つて木綿季が俺の義妹になつてた……なんでそうなつたかの大体の予想はついて……というか軽い流れで両親が引き取つたつて説明された……まあ別にいいけどさだつて……木綿季が助かつてることと俺の義理だが妹になつてているからな！つと最初からだいぶ話がずれたな……それで起きてから約一ヶ月半だつたと思うけどそれくらいでリハビリを済ませた……というより俺がめちゃくちゃ苦労して終わらせたに近いかな……それでリハビリ終わつてから”あの人”に頼んで明日奈のいる病院を教えてもらつた……見舞いに行つたけどあの須郷だつけ？なんかスイカだとか西瓜だか忘れたけどまあいい：あいつは徹底的に潰して割りたいと思つた：久々だぜここまで人を潰してやりてえつて感情を出したのは……なんか殺気を少しふつけただけでたじろいだからそこまで強いわけじやないつてのは理解した……だから明日奈を助けに行きたいってなつた……それがこの空白の三ヶ月間つてわけだ……あれ？ざつくりするつもりが普通に細かくなつちまつたぜ……まあいやとりあえず昼飯食つて少し休憩してからま

た走ろう

「兄ちゃん！早くご飯作つて～！」

「はいはい。……全く世話の焼ける義妹だ」と……」

プルル！プルル！

「んあ？誰からだ？……はい、神居ですが……」

『おう！カイトか？』

『その声は…エギルか？どうした？俺に電話なんかして？』

『今すぐに俺の経営してるカフェに来れないか？』

「なんでだ？とりあえず向かうけどよ。何か急ぎのようか？」

『ああ。お前にとつても重要なことだ出来るだけ早めに来れたらきてくれ』

『お、おう。わかつた。すぐに行く』

『ああ。また後でな』ピツ！

「兄ちゃんどうつか行くの？」

「ああ。知り合いからすぐにきてくれってな。ちょっと行つてくる。すぐに戻つてくる
つもりだが……ちやんとしてろよ？」

「わかつてるよもう！ボクだつていつまでも子供じやないんだからね！」

「はは。わかつてるさ……んじや行つてくる」

「うん！いつてらつしやい！」

さくて一体何があんのかね？正直もう転生前の記憶なんてほとんど残つてないから
これから何が起きんのかなんて全く想像もつかん。……嫌なことじやなけりやいいん
だが……

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

.....

2度目のリンク・スタート～初めてのことには誰もが弱気になるものさ～

おいつす～☆今日も元気い～頑張るぞい！どうもカイトさんだよ～☆
さて今俺は何をしているかというと……

「おう。案外早くきたな」

「よつすエギル。急に呼び出してどうしたんだ？」

「ああ。お前が欲しがる情報をたまたま見つけてな」

「俺の欲しがる情報？なんだそれ？」

エギルのカフエに呼ばれてきました。：にしても俺の欲しがる情報ってなんだ？

あんまり今は欲しいような情報をなんてあんまないんだけどな～

「口で説明するより見てもらつたほうがいいな」

「？ いまだに掴めていないのだが？」

「まあまあ：つとこれだ」

「画像？ なんでこれを？」

「これだけを見て何か思わないか？」

「？ゲームの世界つてことはわかるけど他になんがあるか？」

「それだけわかれば十分だ。次にこの画像を見てくれ」

「！？アスナ……！？まさか…このゲームの中に……！？」

「ああ。おそらくこのゲーム中にいる」

「このゲームの名前は！？」

『アルヴヘイム・オンライン』通称ALO…そこにアスナがいる

「……そ…う…か…通…り…で…起…き…な…い…わ…け…だ…」ここに囚われられているから現実世界に戻つて
き…て…不…可…能…な…事…件…が…あ…る…」

今このところアミュスファイアやALOを買えるような金は無い…今すぐにでもこつち
の世界に返してやりたい…………！」

「お前が今考えてることはわかる。ALOを買う金がないんだろ？」

「！？ああ。今の俺には生活するための金しかない…それにアミュスファイアも買わな
きやならないだろ？今の俺じゃどうにもできない…………」

「それをなんとかするためにお前を呼んだんだよ」

「どういうことだ？」

「まずアミュスファイアの件だがこれはナーヴギアでも代用が効く」

「それは本当か！？」

「ああそれとALOのゲームソフトだが…ほれ」

「!?…それを俺にくれるってのか?」

「ああ…買ったのはいいがやる時間がなくてなここで取つておくならお前に渡しちまおうつてな」

「サンキュー エギル……！」

「いいつてことよ。ただしいつかこの借りを返してくれよ?」

「当たり前だ……この恩はいつか精神的に……！」

「へっ! それがきけりや十分だ! ほらさつさとお姫様を救つてこいよ」

「…ああ! 絶対にアスナを連れて戻つてくる……! 帰つてきたらここでパーティーでもしようぜ!」

「お! それは楽しみだな! だつたら尚更早くしねえとな?..」

「おう! 今日はサンキューな! また時間があればここにくる! またな!」

「気をつけて帰れよ?」

「わかってる!」バタン!

絶対にアスナを取り戻す……! 待つてろアスナ……!

「あ！お帰り兄ちゃん！」

「おう。ただいま」

「何してきたの？」

「…な／＼にちょっとした世間話だ、特にこれといったことはしてきてないよ」

「ふ／＼ん、そうなんだ！」

「あ、後それと兄ちゃんこれから晩ご飯までやらなきやいけないことがあるから晩ご飯何食べたいか考えておけよ～」

「うん！わかつた！」
ガチャン！

「ふ〜、なんとかごまかせたか……」

木綿季を「まかすのはなんだかいただけないのだが、それも仕方ないことだから。こんな不甲斐ない兄貴を許してくれ木綿季よ……！」

「つと。考へてる暇があるならさつさとALOに入らねえと……」

確かナーヴギアでもいいんだよな？ええつとナーヴギアはつと……

「あつたあつた、こんなところにしまつてたのか……」

また、これを被る日が来るとはな……よしつ！準備完了！早速ダイブ！の前に

「茅場さんからもらつたメモリカード入れないとな……」

おそらくこのカードがなかつたら現実世界の今より動けてないかもな……

「つと、またいらんことを考へてたな……時間がもつたいないしさつさといくか！」

リンク・スタート！」

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

.....

ああ～娘が可愛いんじや～（お巡りさんこいつです）

おいつすく☆リア充爆死しろって思つてたカイトさんだよ～☆

今何をしているかと言うと……

「ここが…ALOの中か？」

ALOにダイブしてまーす。ていうか何気に物静かですな～。森がかなり奥まで繋がってるし…結構いい場所にログインしたんかね？

「つとそういうアイテムとかどうなつてんのかね？茅場さんが言うにはほとんど入つてるらしいけど……」

正直武器だけなんとかしてもらえればなんでもいいんだけどな～

「…ほんとんどが文字化けしてんのな…お！あつた！いや～これ無くなつてたらマジで辛かつたぜ」

え？わかんないつて？しううがないな～（トラン○ス風）簡単に説明するとリズを作つてもらつた剣だ。名前が『伊邪那美』。そ～！厨二病とか言うんじやありません！いや俺も最初は思つたさ…けどもう慣れちつたもんしようがねえだろさて他には何か使えるやつはつと……ん？なんだこれ？

「…正直見たことねえやつなんだがオブジェクト化したほうがいい気がする…やつて
みるか」

「鬼がでるか蛇がでるか運命の采配は…!??.? ポチ

「パパー!!?.?」

「ユイ!?.?」

現れたのは俺の可愛い可愛い愛娘でした……

「…めんなユイ、もう少し早く出してあげればよかつたな」
「いえ、こうしてまたパパと会えて話せてるので大丈夫です！」

なんてええ娘なんや……

「そつか。俺もまたユイと会えて嬉しいよ」
「えへへ、なんか照れますね／＼／＼

「ああ可愛いなーもう!!? 可愛すぎてお父さん死んじやうでしようが!!?」

「そういえばパパ。ママは? 一緒にやないんですか?」

「!!? ああママは…アスナは一緒にやない…けどこの世界にはいる」
「? どういうことですか?」

「SAOをクリアしてから現実世界に戻つてきてない人がまだいるんだ…」

「…もしかしてママがまだ…」

「ああ、まだ帰つてきてない…けどこの世界にアスナがいることがわかつたんだ。だから助けにきた」

「そなんですか……わかりました。私も手伝います!」

「え? 気持ちはわかるけどどうやつて?」

「この世界にはナビゲーションピクシーっていうものがあつて、それがこの世界の攻略に役立つそうです」

「それはわかつたけど…それとユイが手伝うつていうのがどうやつて結びつくんだ?」
「簡単ですよパパ。私はどうやらナビゲーションピクシーになれるみたいです。ほらこ

「なんように」

「ほんとだ…小さいな…」

「…くすぐつたいですパパ！」

「わ、悪い。…そうかこ、れで大体のことはなんとかなりそうだけど地形はどうにもならんからな…せめて誰か詳しい人がいたらいいんだけど…」

「そうですね…最初はこの森を抜けたらいいんじゃないでしょうか？」

「それもそうだな。ずっとここにいるのは何も進展がないからな」

「はい。けどどっちに向かいましょうか？」

「最初は無難にまつすぐ：ん？なんか聞こえないか？」

「…そうですね…誰かいるのでしようか？」

「声のした場所までは把握できるか？ユイ」

「はつきりとはわかりませんがおそらく左側です」

「それさえわかればいいさ。さてさつきの音からして少し急いだほうがよさそうだな」

「そうですね。急ぎましょう！」

172 ああ～娘が可愛いんじゃ～（お巡りさんこいつです）

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

男つてたまにカツコつけたくなるよね

おいつすゞ☆お巡りさんのお世話になりかけたカイトさんだよ☆え？軽く言うもんじやないって？それは俺が一番わかってるよ……

さてそんなことより今何をしているかと言うと……

「だんだん音に近づいてきてるから方向はあつてるな」

「はい！それにプレイヤーの気配が複数人感じられます！」

「サンキユーユイ！あとは危ないから胸ポケットにでも入つてくれ！」

「わかりましたパパ！」

音のする方に向かつて走つてましたゞつてふざけてる場合じやなさそだな……音からするに1対複数人の可能性があるな……もう少し急ぐか

「…もうそろそろだと思うが…………見えた!!？」

「……いい加減諦めてくれないかな!?？」

「そういうわけにはいかねえんだ小娘！そっちこそいい加減吐いてもらおうか！」

何が起きてんだ？言い争い？もしかして心配して損した系？……いやにしてはあの赤い奴らは言葉づかいや態度が悪くねえか？……もう少し様子を見てからにするか……

「お前ももう逃げられないだろ？こつちは6人いるんだしな」

「へ！お前が悪いんだぜ？さつさとすればいいものをわざわざこんなに手間かけさせやがつて」

「お前らなんかに言うもんか！べー!!？」

「おま!!？ふざけやがつて!!？俺を怒らせたらどうなるか思い知らせてやるよ!!？」

ありや？これやばくね？最大級にあの娘やばくね？これは流石にいかねえとマズいな……しかしどうやつて出ていくべきか……まあ普通でいいか

「死ねやああ!!？」

「すいませーん。ちょっと道聞いてもいいですかねー？」

「な、なんだお前!!? どつから来やがった!!?」

「え? どつからつて…そこの茂みからですけど……」

「なんで „スプリガン“ が „エルフ領の森“ から出てくんだよ!!?」

「いや、なんでつて言われましてもね、ログインしたらここにいたんすよね」

「カゲミツさんコイツもしかしたらあの娘のことを逃す作戦では?」

「…なるほどなお前はこの娘の味方なのか」

「へ? いや何言つてんすか? 初対面ですけど…」

(ちつ! 思いの外バレるのが早かつたな: アイツ鋭いな……)

「いやならそんなにフレンドリーに „サラマンダー“ に話しかけてこない普通はな」

「へ? そうなんすか? 自分このゲーム初心者なんでそこのことろよくわからないんすけど…」

「…カゲミツさん見られたんですから一緒に殺つちゃつた方が効率よくないっすか? 正直見てるだけでイライラが止まんないっす!」

俺の方が止まんねえわ!!? あ、あこんな立ち回りするんじやなかつたな、普通の人たちならこれでいけるんだけどなく

「…お前に恨みはないが見られたんだここで死んでもらう。俺らに会つたのが運の尽

「きだと思うんだな」

「つうわけださっさとくたばつてくれよ!!?」ブン!

「ここので襲いかかつてくんのかよおおお!!?めんどくせえがやるしかねえな!!?」

「……おせーよ」ヒュン!

「は?」

「悪いなそっちがその気なら俺も少しは本気でやらせてもらうぞ」

久しぶりの戦闘だ気張つて行こうぜ『伊邪那美』!!?

「まずは先に攻撃してきたテメエからだ」

「ヒツ!」ズパン!

『抜刀術居合疾風雷鳴』

「…まずは一人。どうせこのゲームは死んでも里斯ボーン出来んだろう?なら少しほは楽にできる」

「人を殺したって言う罪悪感がSAOの時より軽くなるからな…」
「こ、こいつめちゃくちゃ強いですよ!!?カゲミツさん!!?」

「…慌てるな俺がやる」

「へえ次はあんたが相手してくれんのか?」

「…樂に死ねると思うなよ?小僧……」

「その言葉そのままそつくり返してやるよ…」

「…コイツ少しできるな……油断しない方がよさそうだそれに……」んなところで立ち止まつてゐ暇なんてねえからな!!?」

「…一気に終わらせる」

「なに?」

《刀八連撃八岐大蛇》

「ふうこんなもんか…そここのあんたもう帰んな。もう二度とこんなことすんじやねえぞ？」

「は、はい!!?すみませんでしたー!!?」

「一件落着つと!」

「…あんた何者?」

「ん?俺は今日ログインしたばつかのしがないただのプレイヤーさ」

「ただのプレイヤーがあんな異次元の動きなんかできないでしょ…」

「それも含めて色々と説明しようか」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
..

弄るのは大好きだけど弄られるのはちょっと無理つてやつ結構いるよね

おいつす／＼いつでも暇人カイトさんだよ／＼☆……自分で言つて悲しくなつてくれるな……

さてそんなことより今何をしているかというと……

「…君ほんとに今日初めてログインしたプレイヤー？すごい慣れてた感じがしたんだけど…」

「本当やで。まあ戦うつてことに関してはベテランだとは自分で思つてるけど

まあ理由はそれだけじゃなくて他にもいっぱいあるんですけどね／＼ってふざける場合じやなかつたな

「もしかして今までP v Pとかそういうのが多いゲームをして来たの？」

「ああ／＼まあ実際そうなんだけど近からず遠からずつて感じかな」

「？どういうこと？」

「確かにP v Pだつたりは色々して來たけどさモンスターを狩るつていうのが一応主流ではあつたな」

「へえ～ちなみにゲーム名はなに?」

ん～これって言つていいやつなんかな?自分には利益はないから言つてもいいと思うけど…どこまで話していいのやら…

「パパ言つてもいいんじゃないですか?」

「ユイ?」

「え!?!? もしかしてナビゲーションピクシーそれ!?!?」

「あ、ああ一応その類ではあるな」

「?一応つてどういうこと?」

ヤベエエエエ!!? 余計なこと言つちまつたあああああ!!?!

「パパ余計なこと言いましたね……」

まつたく持つてその通りでござりますユイ様……

「どううかさつきからそのナビゲーションピクシーが君のこと “パパ” つて呼んでるのはなんで?……もしかしてそういう趣味がある人…………?」

「ちげえええよ!!? 全く持つてそんな趣味はない!!? 断じてない!!?」

「ならちゃんと説明しないとこの先疑われ続けますよパパ」

「はい……ちゃんと説明します……」

「その説明の前に私たち自己紹介してないですよね? 今のうちにしちゃいましょう!」

「……確かに、
今のうちにやつちやいましょうか」

「ウイツス⋮」

「私からしちゃうね。私は“リーフア”、種族は見ての通り“シルフ”だよ」

「んじゃ俺も簡単にではあるが…俺はカイト、種族は『スブリガン』ログインしたときになんでか知らんがこの森にいた。んでこっちが……」

!

「…あなたやっぱりそういう趣味が…」

だからねえって言つてんだろが!!?なんでユイが俺の子供なのかを含めて俺のこと
をいろいろ話すからこれ以上そういう風に言わないとれ……そろそろ俺のメンタル
が折れて自害しそうになるからやめて……」

「ゴメン w ゴメン w あまりにも反応が面白くて w」

「……それもそれで腹立つな」

「それは置いといてさつきの話に戻るんだけどなんでもそんなに強いの？」

「ああゝそれはな……

182 弄るのは大好きだけど弄られるのはちょっと無理ってやつ結構いるよね

S
A
O
つ
て
ゲ
ー
ム
知
つ
て
る
か
?』

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
.....
.....
.....

子供に説教されるつてかなり心に来るんだね……

「S A O ってゲーム知ってるか？」

「…知ってるも何もかなり世界的に有名なゲームじやない…もちろん悪い方でのね」
「ハハ、確かにそうだな。けど俺は俺で楽しかったけどなあつちでの生活は」

「“あつちでの生活”つて……もしかして『S A O 帰還者』!? ?」

「おう。それに自慢じやねえが一応攻略組だつたぜ」

「一応つて…そりや強いわけね……それにもかなりというかすぐスピードが早
かつたんだけど…あれつてどういう仕組みなの?」

「ああゝあれはちょつち特殊でな…簡潔にいえば茅場さんからの報酬で „S A O 内で俺
が使つてたスキル、ステータス、ある一部のアイテムを他のゲームでも使える” つてい
うバカげてるモノをもらつてな…」

「確かにバカげてるけどだからといつてそんなスピードでないでしょ!? ?」

「チツチツチ！甘いな／リーフア！」

「どういうこと？」

「決まつてんだろう？俺のステータスがA G I 極振り：いわゆるスピード極振りのステー

「タスだつてことよ！」

「……あんた命がかつてるのにそんなアホなことしてたの？」

「いやまあ確かにそうだけどさ…俺だつて真剣に悩んだんだぜ？まあ辿り着いた結論が“当たらなければどうということはない”っていう素晴らしい答えが……」

「パパ…それつてつまり脳筋ですよね？何も考えたくなかつたんですよね？」

「いや、あの、その、えつと…はい…全くもつてその通りです……」

「いやユイちゃんに…子供に言い負かされる親つて……」

「そんなこと言つてもさー！ほんとに当たんなかつたらダメージ受けないし続けると思つたんだよー！…まあ最終的にはかなり被弾が多かつたけどさ……」

「いやダメじやん!!？」

「つと。かなり話が脱線したな」

「パパがちよつと余計なことを言うからです！」

「はい…すみません……」

「まあまあ…それにしてもここまで話聞いてさ少し疑問に思つたんだけど…」

「うん？何かね？」

「どうしてカイト君はA L Oに来たの？」

「!!?…そう…だな…：“ある目的”を達成するため…かな」

「その“ある目的”つて？」

「ユイにとつての“ママ”を現実世界に戻すために」

「どういうこと？」

「まだ『S A O 帰還者』で現実世界に帰つて来てない人がいるのは知つてるよな？」

「うん。ここ二週間ぐらいずつとニュースでやつてるよね」

「そのうちの一人がこの世界にいるつて話を聞いてな。それに証拠写真も見せてもらつた。そこに映つてたのが……」

「ユイちゃんの“ママ”つてことね」

「そういうことだ」

「私にとつてもパパにとつても大切な人なんです」

「ユイちゃん……」

「そういうわけだ。俺たちはすぐにでも“アイツ”的元にいかねえと行けねえ……」

「けどパパ。私たちはこの地形も把握してませんしなんだつたらマップも持つてませんよ?」

「うなんだよなあ……とりあえずこの森を抜けてからじゃないと今いる場所を把握でき

んしな……」

「あのさ」

「ん? どうしたリーフア?」

「カイト君たちがよければだけど私が案内しようか?」

「へ? いやいやいーよ! そこまで迷惑かけるわけにはいかねえからそんな提案しなくても……」

「助けてもらつたお礼……まだしてないから……それにそんな話を聞いたら放つておけないよ」

「んーいやでもな…」

「パパお願ひしましよう」

「ユイ…けどなー……」

「確かにパパのいうことは一理あります: けどむやみやたらに移動するだけだとかなり時間を使つてしまります。ここはリーフアさんの提案を受けて効率よくいきましよう」「……わかった。確かに無闇に行くと変に時間を使つちまう……リーフア道案内お願ひできるか?」

「任せて! こう見えても大体の場所は把握してるから大船に乗つたつもりでいてね!」「うし! これでようやく目的を達成するためのスタートラインに立てた! よろしく頼むぜリーフア!」

ちよつと時間がかかるかもしんねえけど待つてろよ…アスナ…絶対現実世界に戻し

188 子供に説教されるってかなり心に来るんだね……

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u

.....
.....
.....

てやるからな
…

人に言われて初めて気づくことつて多いよね

おいつすゞ☆少し別のものに集中するとちょっと大事なことを忘れるカイトさんだよ／☆え？ それは重症だつて？ な、何を言つてるのかな？ ベ、別に大丈夫じやないかな？（かなりの重症）

さて今何をしているかと言うと……

「案内は確かにするけど目的の場所つてどこなの？」

「あーそういうや言つてなかつたな。えーっと真ん中のでつかい木：【世界樹】だつけ？ 確かそんなとこだつた気がする」

「え！？ うそ！？ あそこは難易度が異常に高いんだよ！？ そんなとこに行くの！？」

「うん？ そんな高いん？ こつから見た感じはそんな風には見えないけどな～」

「それはそれでどうかと思うけど……でも難易度はほんとに高くて今ALOにいる全種族の精銳のプレイヤーが連携をとらないとおそらく勝てないつて言うふうに言われてるくらいには難易度が高いダンジョンなんだよ」

「へえー。ま、俺には関係ないつすけどね～」

「え？ もしかして一人で攻略しようとする気？」

「おう」

「馬鹿じやないの!? 私の話聞いてた!?」
「おうちやんと聞いてたさ。でもよはつきり言つて無理な話だぜ? 全種族の精銳たちが
しつかりとした連携を組むなんてよ」

「どういうこと?まあわからなくはないんだけど…」

「んーなんか心当たりがあるような言い方やな」

「うん…だつて種族間であまり仲が良くないんだよ」

「ほえーなるほどな。なら尚更無理だな」

「それでどうして連携ができないの?」

「連携ができないってわけじやねえんだけど…どうせ挑むつてなつた時連携をとるため
の練習とかすると思うんだけどさ、そこで一悶着が起きるかもしだし…あとはいくら
連携が取れても本当に完璧な連携つて取れないんだよ」

「そうなの?だつて指揮を取る人だつているわけでしょ?」

「いたとしてもだ。常日頃から連携をとつてるわけじやないし…必ずしも自分にあつて
るプレースタイルではないわけだから集中力もすぐに切れる」
「へえーやっぱりそういうことをかなり経験して來たからわかるんだね」

「そうだな…といつても俺自身はあんまり人に迷惑かけたくなかつたからパーティーと

かそんな組まなかつたな」

「へえ…………ん? つてことはソロプレイヤーだつたつてこと?」

「おうほほ一人で活動してたな」

「すごいね……過酷な状況下でソロでしてたなんて……」

「うん? そうか?」

「パパ……パパは気付いてないかもしませんがはつきり言つて異常なことをしてたんですよ? たつた一人で迷宮区攻略、クエストの消化、マップの公開、マップ公開のためのマップ埋め等々……とても一人でできることじやないですよ」

「ああー……確かに……つてことは俺頭おかしいほど色々やつてたんだな……」「素性を聞いてなおかつ今の話を聞いての質問なんだけど……」

「おうなんだ?」

「カイト君つて何者?」

「うーん……あえて言わせてもらおう! 俺はただのゲームだ!」

「いやどちらかというと社畜に近いんじゃないですか?」

「オーマイゴッド!!? ユイに言われるとどストレートに心に来る!!?」

「あ、あはは」

「さて話が長くなつたしさつさと行こうぜ時間がもつたいねえし」

「立ち直んのはつや!?」?

「そりや切り替え早くないと死ぬ場面が多いからな」

「はあもうツツコムのも疲れたよ」

「さあさあ行こうか!!?」

to be continue.....

空を飛ぶつてイメージじやなんとかならない部分つてあるよね

おいつす／☆プリ○ネつてなんでこんなに楽しいんだろうつてずっと考えてるカイトさんだよ／☆えつ／作者の心の中が丸見えだつて？ソンナコトナイジヤナイデサスカーという茶番は置いといて…今何をしているかというと…

「そうそう！そんな感じで飛行するんだよ！」

「なるほどな…覚えれば割と簡単なんだな……」

「でもすごいね。少ししか練習してないのにここまでできるなんて……」

「確かにそうですね。いくらパパの要領がいいとしても初心者なのにここまでではできませんよ」

「ああ／確かにな…正直リーファの教え方がうまいんじやないか？」

はい私ことカイトはリーファに飛び方を教わつていますまる。いや／リーファつて教え方うまいんやね。俺自身はそこまで要領いいわけじやないんだけどすんなり体に教えられたことが入つてきてな…今は大体空を自由に飛べるぐらいまでは成長できたんじやないかな？知らんけど

「この調子ならすぐに行けそうだね！」

「そうだなう。……うし！そろそろ行くか！」

「パパ大丈夫ですか？あまり慣れてないのでもう少し時間をかけてからでも……」

「大体慣れたら後は移動しながらでも調整は効くから問題はねえよ」

「パパ…そういうことじゃなくてですね……」

「ん？どういうこと？」

「はあ……ユイちゃんはカイト君のことが心配なんだよ」

「そうです！私はかなり心配してるんですからね！色々なことに無茶しながらやるんですけどからら！」

「うつ…心当たりが多すぎて反論できん……けど今回ばかりはほんとに大丈夫だからな？」

「うー…少し怪しいですがそう言うならわかりました」

「心配してくれんのはありがたいけど俺はいつもできると思つてやつてるだけだからな？」

「それって結局油断してるだけじゃない？」

「…………ノーコメントで……」

「はあ……ほらあんまりのんびりしてられないんでしょ？早めに出来るだけ【世界樹】ま

で近づいちゃお」

「…そうですね。そうと決まれば行きましょう!」

「へいへい……」

なんでこうも女子つてこんな感がいいんだよ……

「ほら! 何ぼ一つとしてんの! 早く行くよー!」

「早くしないと置いて行きますよ! パパ!」

「ちょつり? 待てよ! ?」

……そして時々考えてることがわからないような気がする……もう訳がわからない
よ……

「パパ。目の前からプレイヤーの反応があります」

「えそこまで不思議というわけではないんですが…猛スピードでこちらに向かってき

てます」

「なるほど…ならちょっと不思議だな」

「はい。特にこちらには何もなかつたはずなんんですけど」

「リーファなんか知らん?」

「あーもしかしたらそれシルフ領の仲間かも」

「ん? どいうこと?」

「サラマンダーたちに襲われる前に援軍呼んどいたからもしかしたらそれかも……」「なるほどな」

「もう少しでこちらに着きます」

「リーフアちゃーーん!!? !!?」

「ゲッ! レコン!!?」

「おん? もしかしなくとも知り合い?」

「うん……なんであいつが……」

「？なんか彼とあつたん？」

「…いやカイト君が気にすることはないよ……」

「？そういうなら気にしないが」

「リーフアちゃん大丈夫？怪我してない？」

「あーもう！私は大丈夫だから！」

「けど僕心配したんだからね!!？」

「心配かけたことは申し訳ないと思つてるけどさ！」

「……なんかほんわかするな」

「そうですね。けどパパとママも遠くから見るところこんな感じですよ？」

「あ、マジで？」

「はい！私も正直近づくの戸惑います」

「…なんかごめんな？」

「いえ気にしないでください」

「ちょっとカイト君ユイちゃんと話してないでこいつ止めるの手伝つて！」

「ええ？なんで俺が……」

「文句を言つても先には進みませんし行きましょう」

「はあ面倒ごとばつかだな……あながち茅場さんが言つてたことって間違いじやなかつ

198 空を飛ぶってイメージじゃなんとかならない部分ってあるよね

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u

.....
.....
.....

たな
.....
鬱
になりそ
う
.....
_

強いが故に周りが見えづらくなるつて本当にあるんだね

おいつすゞ☆挨拶が特に思いつかないカイトさんだよゞ☆え？ ネタ切れかつて？ 全くもつてその通りだよこんちきしよう……！
さて今何をしているかというと……

「リーフアちゃんを助けてくれてありがとうございます！」

「あ、うん。別に気にしなくていいよたまたま通りかかっただけだから頭を下げられるほどのことはしてないよ」

「いいえ・サラマンダーの幹部クラスに勝てるプレイヤーなんてそこまで多くないですから誇つていいと思います！」

「？ そうなの？ 正直あいつらメチャメチャ弱かつたけどなゝ」「……は？ 流石に冗談ですよね？」

「冗談じやねえよ。はつきり言つてあいつらはただ装備に任せて自分の力の半分も出せてねえ連中だつたぞ」

「わかった？ レコンこれがカイト君の強さなの。君が思つているよりも何倍も強いんだよ」

「そ、 なんだ……」

「あ、 そうだレコン。 私 “パーティ一抜ける” からよろしく」

「え!? どういうことリーフアちゃん!!?」

「あー言い方が少し悪かつたね “一時的にパーティ一抜けてカイト君の道案内する” からそれ伝えておいて」

「え!? あ、 うん… それはわかつたけどどうして道案内を?」

「助けてもらつたお礼」

「そうなんですか? カイトさん」

「ああ。俺は別にお礼はいいんだけどリーフアがどうしてもつてな。それに俺自身この世界の地理は全くわからんからなんかそれがちょうどよく当てはまつてな……なんかごめんなレコン」

「いえいえ! カイトさんが謝ることじゃないですよ! リーフアちゃんがそういうならわかつたよちゃんと伝えておくよ」

「ありがとうレコン! それじゃカイト君さつさと行こう!」

「あ!? ちょっと!? リーフア!? ……はあ」

「あ、 あはは」

「リーフアはいつもあんな感じなのか?」

「そうですね」

「ヤンチャヤというかなんというか…もう少しお淑やかに出来んのか?」

「あ、あはは…カイトさん」

「んあ?なんだレコン」

「リーフアちゃんのことよろしくお願ひします!」

「え? いきなりどうした?」

「正直心配なんです…リーフアちゃんいつもあんな感じなので……」

「あ一つまりかなり前のめりになる節があるからってことか?」

「はい…カイトさんならしつかりと抑えてくれると思ったので……迷惑でしたか?」

「いやそんなことはねえよ。レコン! リーフアのことは任せろ俺が責任持つてちゃんと守つてやるよ。レコンはリーフアのこと好きだもんな!」

「ちよつ!!? カイトさん!!? なんでわかるんですか!!?」

「にやははは! だつてお前わかりやすいからな! ……頑張れよ?」

「はい! カイトさんに応援されると勇気が湧いてきます!」

「そうそのいきだ! んじや俺もそろそろ行くぞ?」

「はい! 呼び止めてしまう形になつてすみませんでした!」

「いいつてwそんな気にすんなwんじやまたどこかで会おうぜ!」

「はい！またいつか！」

レコンはかなり優しい子やな……（しみじみ）つてそんなことよりさっさと行かねえ
とあいつに置いていかれる！

「ちよつと待つてくれええええ＝？俺をおいていくなああああ＝？」

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
.....

たまに褒めてるのか馬鹿にされてるのかわからないやつってあるよね

おいつすゝ☆最近みんなから忘れられてるカイトさんだよ☆……言つてて悲しい

なこれ……さてそんなことは置いといて、今なにをしているかというと……

「それにしてもホントにカイト君の成長速度つて異常だよね…」

「それは馬鹿にしてんのか？それとも褒めとるのか？前者だつた場合流石に怒るぞ？」

「褒めています！だつてこの短時間でここまで飛行がスムーズにできる人つてあたし見たことないんだよね」

「まあパパですからあまり深く考えない方がいいですよ」

「それもそうだね」

「なんで“俺”だからっていう理由でそんな結論に至るの？悲しくなつてくるよ？」

「ゴメンつて。さ、早く行こ？あんまり時間ないんでしょ？山も越えないといけないからかなり頑張らなきや」

「そうなのか…山つつうのは目の前にあるあの山のことか？」

「そうそう」

「飛んで越えらんねえのか？」

「残念だけど基本的には山や洞窟なんかは飛んで移動はできなくなってるんだよ」

「…なるほどな…しつかりとゲームバランスは保ててはいるんだな」

「山は歩いての移動になるからかなり時間かかるからそこは頭に入れておいて欲しいかな」

「了解。……ん？」

「どうかしたの？」

「…いや誰かに見られてる気がしてな……」

「気のせいじゃない？ 誰かがいるわけでもないし私たちをつけてくる物好きな人でもない限り尾行するなんてしないでしょ」

「…確かにそうかも知れんがな…不吉なことが起きなけりやいいけどな……ユイ周りになんかの反応は？」

「はい。特に異変はないですがさつきから虫みたいなものがついてきています」

「!?!まさか追跡魔法!?! カイト君今すぐに消さないと！」

「なんとか知らんが了解！」スパツ！

「これでいいか？」

「うん、ありがとう。あのまま気づいてなかつたら私たちがログアウトしたときにやら

れるところだつたよ」

「へえ、そんなPK方法もあるんかこの世界は」

「うん、だから早めに気づけてよかつたよ」

「……そういうもうこんな時間か…」

「ほんとだ！ 私もうそろそろでご飯の時間なんだよね」

「なら山に入る前に一旦ログアウトして色々済ましてからきた方が良さそうだな」

「そうだね。どっちからログアウトする？」

「ん？ 一斉にログアウトしちゃダメなんか？」

「それだとPKに会う可能性があるから1人が監視しないと危ないよ。それにさつきのこともあるしさ」

「……言われてみればそうだな。なら俺は後でいいよ。俺ん家は飯の時間少し遅いからな」

「なら先にいかせてもらうね！ 護衛よろしく！」

「へいへい」

「ほーこれでログアウトが完了するんか」

さて護衛とは言わたるもののにやることもないし戻つてくるまで何をしてようか

⋮

「パパ」

「ん? どうした? ユイ」

「大丈夫ですか?」

「何がだ? 我は元氣だが?」

「最初に再開した時からずつと思つてたんですが…少し張り詰めすぎじゃないですか?」

「!!?…………確かにこの世界にきてからずつとアスナのことしか考えてないな…」

「ママのことを心配する気持ち、助けたい気持ちはわかりますが今のままいけばその前にパパが壊れてしまいます」

「…そうかも知れんがどうしても助けたいって気持ちが前のめりになるんだ…頭ではわかつちゃいるんだがな」

「せめて今だけはリラックスしてください。休息も必要ですから」

「…………ありがとなユイ心配してくれて」

「いいんですよ。わたしには『これくらい』しかできませんが…」

「『これくらい』じゃないさ。ユイの言葉で俺が救われたんだあんまり自分を卑下しないでくれ」

「ごめんなさいそしてありがとうございます。パパ!」

「ユイが元気であればそれでいいよ」

ありがとなユイお陰で気が楽になつた：確かに俺は張り詰めすぎてたな…これからは肩の力を抜いて少しリラックスした状態でやるか…：ユイには助けられてばつかだな：ユイのためにも早くアスナを助け出さないとな…

t
o

b
e
c
o
n
t
i
n
u
.....